HOKUGA 北海学園学術情報リポジトリ
学校法人北海学園
北海学園大学
北海商科大学

タイトル	マルクスと世界史 …ミヒャエル・R・クレトケ
著者	大屋，定晴；OYA，Sadaharu
引用	季刊北海学園大学経済論集，70(4)：125-166
発行日	2023-03-31

Hokkai-Gakuen Organization of Knowledge Ubiquitous through Gaining Archives.

《翻訳》

マルクスと世界史

ミヒャエル・R・クレトケ
大　屋　定　晴　（訳）

【解題】

本訳稿はドイツ語で発表された次の論文（以下「原著」）の全訳である。

Michael R. Krätke, “Marx und die Weltgeschichte”, in: *Beiträge zur Marx-Engels-Forschung. Neue Folge 2014/15*, Berlin, 2016, S. 133–177.

なお原著については，次の英語抄訳版（以下「英訳版」）がある。

Michael R. Krätke, “Marx and World History”, trans. by Nathaniel Boyd, in: *International Review of Social History*, Volume 63, Issue 1, April 2018, pp. 91–125.

この英訳版は，原著の約４分の１（本訳稿〔１〕節の２段落目以降と〔２〕節の全文）を省略するとともに，この省略を補う意味でのいくつかの注記と，原著者による本文，原注の追加が所々行なわれている。また原著における引用の不備が訂正されている。

これにたいして本訳稿（以下「日本語版」とも記す）は原著全文にもとづいて訳出した。そのうえで英訳版での追記・修正については，原著者と確認したうえで適宜，組み入れた。これらの変更箇所については，煩瑣となるため，そのすべてを明示することはしない。ただし日本語版にたいして新たに加えられた修正箇所については，訳注ないしは訳者追記で明示する。

原著者のミヒャエル・R・クレトケは1950年に旧西ドイツで生まれ，ベルリン自由大学で学んだのち，アムステルダム大学を経て，イギリスのランカスター大学で教鞭をとった。現在はランカスター大学名誉教授であり，アムステルダムで研究活動を続けている。彼は，資本主義体制下での「租税」国家研究，マルクス主義史研究で知られており，また *Beiträge zur Marx-Engels-Forschung* の科学諮問委員，ドイツ社会民主党左派とつながりのある *SPW: Zeitschrift für sozialistische Politik und Wirtschaft* の共同編集者も務めた。ローザ・ルクセンブルク財団やATTACドイツなどの研究助言者にもなるなど，左派政治運動や社会運動にも積極的に協力している。

本訳稿は，マルクス最晩年の歴史研究ノートを検討しつつ，マルクスの「歴史」概念，あるいはその「世界史」像を探究する。その主張はさしあたり以下の４点にまとめられよう。

第一に，マルクスの経済学批判と歴史研究との関係性である。マルクスは，歴史の社会科学的

探究 ──「理論的歴史」の探究 ── を進めるなかで，「歴史的発展経過」── 前資本主義的生産様式の歴史と，資本主義的生産様式そのものの歴史の両方 ── の仮説的表象を得ようとする。そして，その過程で析出される諸範疇を駆使して，資本主義的生産様式を「理念的断面図 idealer Durchschnitt」[a] のかたちで叙述しようとする。

ちなみに日本においては「マルクスの方法を論理説と解するか，論理＝歴史説と解するか」という論争が交わされたが，本訳稿の主張は，その議論にも一石を投じる。資本主義的生産様式を明らかにする論理的展開が，その歴史的生成過程と完全に照応するという考え方を論理＝歴史説と呼ぶとすれば，マルクスの『資本論』の叙述は，単純な論理＝歴史説ではない。叙述で使われる諸範疇は，「世界市場の広大な歴史」の一部であると同時に「資本主義の長期の歴史」の一部でもあるが，それは「理念化された」年代継起のかたちで叙述に組み込まれている。だが他方で，この叙述を単なる「論理的展開」と見なし，歴史の歩みと無縁だとする極端な論理説もまた，本訳稿では批判される。その論理を構成する諸範疇は，歴史研究のなかから得られた一定の歴史的発展経過の表象を前提にしており，しかもまた，その研究のなかで絶えず検証されながら導出される。このマルクスの認識方法のもう一つの側面も看過されるべきではない。あるいはマルクスの「経済学の方法」の言葉で表わすならば，「抽象的諸規定が思考の道をへて具体的なものの再生産に向かっていく」という「第二の道」（いわゆる上向法）は，「完全な表象が蒸発させられて抽象的規定とな」る「第一の道」（いわゆる下向法）と切り離されて理解されてはならず，しかもこの「完全な表象」の獲得さえもが分析的課題の一部なのだ。しかしながら，叙述の前提となる歴史的表象もまた，マルクス自身の歴史研究のなかで絶えず刷新される可能性に開かれており，だからこそ，これらの諸範疇を組み込んだ『資本論』全 3 部の「弁証法的」叙述はついに未完のままに残されたのである。

第二に本訳稿では，マルクスの歴史研究の足跡がたどられるとともに，その最晩年にあたる 1881–82 年の 4 冊の抜粋ノートの概要がまとめられる。17 世紀までの「世界史」の経過をマルクスがまとめたこの晩年のノートについては，旧ソヴィエト連邦マルクス・エンゲルス・レーニン研究所の『マルクス＝エンゲルス・アルヒーフ』シリーズの一部としてロシア語訳が出版された（Карл Маркс, Фридрих Энгельс（Karl Marx, Friedrich Engels）, *Архив Маркса и Энгельса*, Том 05- 08, Москва: Госполитиздат - Институт Маркса-Энгельса-Ленина при ЦК ВКП (б), 1938–46）。またノートの一部はドイツ語にも訳されている（本訳稿，原注 35 参照）。だが多言語混合状態で書かれたマルクスの執筆ノートそのものを再現したものは，『新マルクス＝エンゲルス全集』（*Marx-Engels-Gesamtausgabe, MEGA*[2]）において，その抜粋ノートをおさめる第Ⅳ部門の第 29 巻として刊行される予定である。他方，管見のかぎりでは日本語訳は存在しない。その意味で本訳稿は，日本で紹介される意義があろう。晩年の「世界史」抜粋ノートは，マルクスの歴史研究の一種の総括と思われるからだ。

---

[a] ドイツ語の「Durchschnitt」には「平均」とともに「断面図」という意味もある。「idealer Durchschnitt」は，『資本論』の既訳では「理念的平均」などと訳されるが，本訳稿では，原著の示唆を受けて「理念的断面図」と訳出する。マルクスのこの用語の含意については次も参照。W. F. Haug, *Das »Kapital« lesen - aber wie?* *Materialen zur Philosophie und Epistemologie der marxschen Kapitalismuskritik*, Hamburg: Argument, 2013, S. 37–65．なお，この言葉はマックス・ウェーバーの「理念型」をも彷彿とさせる。だが「理念的断面図」は，単なる論理的抽象ではなく，歴史的な「現実の参照」という「経験的」妥当性を有する点でウェーバー的「理念型」とは異なっている（ebenda, S. 48）。

第三に，マルクスの「世界史」概念の二重の意義が指摘される。マルクスによれば「世界史」とは，近代資本主義の発展によって生みだされた歴史的範疇である。この「世界史」へと至る近代資本主義の歴史的「発展」は，一方では，歴史研究の繰り返しのなかからマルクスにとっては仮説的に「表象」される。それは，資本主義の歴史そのものを超える射程をもった「唯物論的な歴史把握」のための「導きの糸」に 1859 年に概括されると同時に，資本主義の歴史の「表象」もまた —— 私見ではジョヴァンニ・アリギの『長い 20 世紀』[b] の議論も彷彿とさせるかたちで ——『資本論』でその素描が試みられる。しかし他方でマルクスは，この「表象」や「弁証法的」叙述の仮説的限界も早くから自覚していた。そのうえで彼の「世界史」研究は，近代国家形成と関連するかたちでの近代資本主義体制の複線的歴史理解へと帰結する。こうした複線的歴史理解が晩年のマルクスにあったことは，彼の民族学・人類学研究からも明らかであり，近年，他の研究者（ケヴィン・アンダーソン[c] など）によっても指摘される。本訳稿の特色は，マルクスのこの理解が，自身の歴史研究による「導きの糸」の継続的再考作業のなかにあって，とりわけヨーロッパ地域を中心とした近代資本主義諸国家の複線的，複合的発展の自覚の深まりと関わると推測する点にある[d]。

最後に本訳稿は，昨今の各種マルクス解釈（「マルクスの新しい読み方」など）への批判を含んでいるが，しかし私見として重要なのは，脱「政治」的なマルクス読解への批判を示唆している点である。マルクスの終生の課題の一つは，近代資本主義の発展と国家の発展との連関であった。国家と政治の次元は，社会の再生産に焦点を当てる政治経済学批判と連関する。この構図をどのように読み解くのか —— 歴史＝社会科学者であると同時に革命家でもあったマルクスの終生の営為はそこにあった。これをマルクスの「世界史」抜粋ノートは暗示していよう。ちなみに訳者は，イギリスのマルクス主義地理学者デヴィッド・ハーヴェイの議論のなかに広狭二義の二重の「地理的不均等発展」論があると指摘した[e]。そして彼の広義の「地理的不均等発展」論と関連するものとして，マルクスの「歴史的運動」概念に着目した[f]。その「歴史的運動」は，長期的観点からは「経済的土台」の変革を伴う（この視点が，『経済学批判』序言の「導きの糸」の諸命題のなかで，いわゆる「土台＝上部構造」論として強調される）。だが，短期的，中期的な観点からは，この運動は社会の他の諸要素との媒介・連関の過程（実践）として展開する。資本は，こ

---

[b] Giovanni Arrighi, *The Long Twentieth Century: Money, Power, and the Origins of Our Time,* London: Verso, 1994. ジョヴァンニ・アリギ，土佐弘之監訳『長い 20 世紀 —— 資本，権力，そして現代の系譜』，作品社，2009 年。

[c] Kevin B. Anderson, *Marx at the Margins: On Nationalism, Ethnicity, and Non-Western Societies*, Chicago: University of Chicago Press, 2010. ケヴィン・B・アンダーソン，平子友長［他］訳『周縁のマルクス —— ナショナリズム，エスニシティおよび非西洋社会について』，社会評論社，2015 年。

[d] このことを山之内靖氏や淡路憲治氏のように，マルクスの世界史認識における「方法的転回」や「見解の根本的訂正」と解するか否かは別途検討しなければならない（山之内靖『マルクス・エンゲルスの世界史像』，未来社，一九六九年，淡路憲治『マルクスの後進国革命像』，未来社，一九七一年）。しかし少なくとも本訳稿で強調されるのは，マルクスの「唯物論的な歴史把握」という研究計画の，終生にわたる「継続性」である。

[e] 大屋定晴「ハーヴェイによる地理学的批判理論の構築 —— グローバル資本主義に抗するコスモポリタニズムのために」，デヴィッド・ハーヴェイ，大屋定晴［他］訳『コスモポリタニズム —— 自由と変革の地理学』，作品社，2013 年，501-557 頁。

[f] 大屋定晴「マルクスと歴史的運動」，宮田和保［他］編『21 世紀に生きる資本論』，ナカニシヤ出版，2020 年，225-251 頁。

れらの諸要素を「従属」させることで，歴史的，有機的体制として確立する。その要素のなかに国家と政治の次元も存在する。それゆえ資本主義社会の革命的変革には，社会の諸要素の個々の変革，ならびに諸要素相互間の新たな連関の構築が必要なのであり，国家と政治の次元への取り組みもまた，この一環にある。その意味で，いま一度マルクスの議論は政治的に読み解かれなければならない。晩年の抜粋ノートに示唆される議論は ── たとえ『資本論』の完結を困難にしたのだとしても ──，このマルクスの「歴史的運動」にかんする理論的仮説（歴史の「理論的表象」）の存在を改めて示唆するとともに，政治と国家の問題に終生格闘しつづけたマルクスの姿を浮き彫りにしている。

【表記ならびに参照文献について】

原注は，原注番号をアラビア文字で記し，ページ欄外に原注を訳出した。また訳注は，小文字のローマ数字で番号を付し，これもページ欄外に記す。〈　〉内は原著者による引用文への追記・省略であり，〔　〕内は訳者による追記である。また［　］は参照文献内での補記を指す。

原著ではマルクス，エンゲルスの文献は下記の三つの全集ないしは著作集が適宜，参照される。

（A）*Karl Marx Friedrich Engels Gesamtausgabe (MEGA^1),* Moskau, 1928–40.
（B）*Marx Engels Werke*, Berlin, 1956–.
（C）*Karl Marx Friedrich Engels Gesamtausgabe (MEGA^2),* Berlin, 1975–.

これらの文献について原著では，（A）は「*MEGA*^{1}」，（B）は「*MEW*」，（C）は「*MEGA*^{2}」と略記されている。

（A）は，日本では『旧 MEGA』とも呼ばれる。マルクスとエンゲルスの全集企画としては最初の試みであったが，スターリン統治下での旧ソヴィエト連邦における「大粛清」などの影響もあって，1928 年から 4 年にかけて 14 冊しか刊行されなかった[g]。（B）は，日本では『マルクス＝エンゲルス全集』の名で知られているが，マルクスらが多言語で書いた著作がすべてドイツ語に翻訳されている。また，その内容もすべての著作を網羅しているとは言いがたい。（C）は，いわゆる『新 MEGA』ないしは『新マルクス＝エンゲルス全集』とも称される。多言語で書かれたマルクスとエンゲルスの著作・書簡・抜粋ノートをそのまま公開する企画として 1975 年に始まり，現在では出版ならびにオンライン公開の二方式で継続されている。

なお原著で（B）のみ記載されたものが，英訳版では（C）の参照指示によって補足される場合が散見された。本訳稿では，（B）と（C）の双方に掲載されている典拠については，原著者の同意を得たうえで，両方の書誌情報をすべて記載した。

ちなみに上記（B）の日本語訳についてはその大部分が次のかたちで出版された。

（D）カール・マルクス，フリードリヒ・エンゲルス，細川嘉六・大内兵衛監訳『マルクス＝エンゲルス全集』，大月書店，1959–91 年。

---

[g] 前述の『マルクス＝エンゲルス・アルヒーフ』（*Архив Маркса и Энгельса*）は当初は *MEGA*^{1} の準備のための関連資料や研究論文を掲載する学術雑誌であった。しかし，これも 1924 年から 82 年にかけて 16 冊が出たのちに刊行停止となった。

上記（C）については，これまでのところ第Ⅱ部「『資本論』と準備労作」第1－3巻にあたる部分のみ次の日本語訳が出版されている。

（E）カール・マルクス，マルクス資本論草稿集翻訳委員会編『マルクス資本論草稿集』，大月書店，1977-93年。

これらを参照するにあたっては，欄外注記内で，（A）については「*MEGA*[1]」と略記して，その後に巻数，頁数を記す。（B）については「*MEW*」と略記し，その巻数，頁数を記載したあと，（D）として日本語訳が出版されているものについては，〔　〕内に著者名，著作名を記したうえで，『全集』と略記し，対応巻数（丸数字），頁数の順で記している。（C）については「*MEGA*[2]」と略記したのち「部数（ローマ数字）／巻数」を示し，次に頁数を記載する。（C）のうち，（E）として日本語に翻訳されているものについては，（C）の参照情報のあとに，〔　〕内に著者名，著作名を記し，『草稿集』と略記したうえで対応巻数（丸数字），頁数の順で記載する。

上記（D），（E）以外で日本語に翻訳されているマルクス，エンゲルスの著作，ならびに彼ら以外の日本語訳文献についても，必要な範囲で，その書誌情報を訳者追記で示す。

ただし訳文については，既訳あるものであっても原典参照のうえで適宜，変更した。

【翻訳】

マルクスと世界史

ミヒャエル・R・クレトケ

「歴史全体が新たに研究されなければなりません。」
フリードリヒ・エンゲルス〔Friedrich Engels〕（1890年）[1]

〔1〕マルクスと「理論的歴史〔histoire raisonnée〕」

マルクス〔Karl Marx〕は，いわゆる「唯物論的な歴史把握」を（〔エンゲルスと〕共同して）確立した人物と見なされる。ちなみに彼は「史的唯物論あるいは唯物史観〔Historischer Materialismus〕」という言葉を使っていない。まさに「歴史理論」とか，より正確には「世界史の経過」といったものを描きたいのであれば，歴史を徹底的に研究しなければならない。そして，混沌たる厖大な「事実」，資料，実にさまざまな取得物，伝承，そして成文化された（それゆえにすでに解釈された）歴史を正確に知ることもなく済ませるわけにはいかない。社会科学にとっ

[1] 原注105参照。

て，人類のあらゆる歴史はその対象であると同時にその素材でもあり，したがって社会科学は「歴史的かつ社会的」学問ということに尽きるのである。『ドイツ・イデオロギー』〔*Die Deutsche Ideologie*〕の草稿断片にある一文には，手短な基本方針として（そして誤解も受けやすいかたちで）こう書かれている。「われわれは一つの固有の学，すなわち歴史の学しか知らない」[2] と。この初期の立場から二人の著者〔マルクスとエンゲルス〕は「事柄を追いながらも決して外れることがなかった」[3]。

歴史とは，マルクスとエンゲルスにとって社会科学を意味している。これは経験的，理論的社会科学であって，哲学ではない。彼らは，あらゆる歴史哲学と断絶する。彼ら自身の把握は，歴史研究から得られた成果なのであって，さらなる歴史研究のための「導きの糸」として役立つものと期待される。マルクスによって 1859 年に（『経済学批判』〔*Zur Kritik der Politischen Ökonomie*〕の序言で）想定された彼自身（とエンゲルス）の新たな歴史把握とは，このような「導きの糸」なのである[4]。導きの糸は歴史哲学ではありえない。それは一つの仮説命題であって，それ以上でもそれ以下でもない。この命題は，人間社会の巨大な変動に，あるいは人間社会の形づくり〔Formierung，形成〕という過程（ヘーゲル〔Georg Wilhelm Friedrich Hegel〕の用語[5,i]）とその変容とに力点を置きつつ，考察可能な ── つまり計測・比較可能な ──「諸事実」の因果連関を，十分な論拠をもって推測するものなのである。導きの糸の利用価値〔Gebrauchswert，使用価値〕が保たれるには，導きの糸自体に時々刻々と手が加わらなければならない。まさに，これこそマルクスがエンゲルスとともに絶えず繰り返したことだ。彼の広範な歴史研究は，その研究人生にわたって，繰り返し再開されては押し広げられた。この歴史研究こそが彼の政治経済理論全体の現実的基礎なのだ（ただし，この点はしばしば否定されたり誤解されたりしている）。マルクスは『資本論』〔*Das Kapital*〕第 1 部刊行後，自分の経済学批判の未解決問題，しかも「叙述形式」だけに留まらない問題に，生涯にわたって取り組みつづけた。だからこそ彼が歴史研究にたびたび取りかかることは，適切かつ首尾一貫した行為であった。

マルクスとエンゲルスは歴史を社会科学として理解したが，その理解は，フランス（初期）啓蒙思想にあった「理論的歴史」，あるいはスコットランド啓蒙思想の「理論的，推測的歴史」といった伝統の特色を帯びている。この二つの伝統は，純粋に物語的な歴史叙述にたいして明示的にも暗示的にも対決した。その主唱者たちは歴史の因果関係を解明し，その歩みを分析しようと

---

[2] *MEW* 3, S. 18〔マルクス，エンゲルス「ドイツ・イデオロギー」『全集』③，14 頁〕；*MEGA*^{2} I/5, S. 824〔マルクス，エンゲルス，渋谷正編・訳『草稿完全復元版　ドイツ・イデオロギー　本巻・邦訳篇』，新日本出版社，1998 年，14 頁〕．これは異文〔正確には末梢箇所〕とされている。

[3] Alfred Schmidt, *Geschichte und Struktur: Fragen einer marxistischen Historik*, München, 1971, S. 36〔アルフレード・シュミット，花崎皋平訳『歴史と構造 ── マルクス主義的歴史認識論の諸問題』，法政大学出版局，1977 年，37 頁〕．次も参照。Max Raphael, *Zur Erkenntnistheorie der konkreten Dialektik*, Paris, 1934, S. 11f.

[4] *MEW* 13, S. 8〔マルクス「経済学批判」『全集』⑬，6 頁〕；*MEGA*^{2} II/2, S. 100〔マルクス「経済学批判。第 1 分冊」『草稿集』③，205 頁〕．

[5] ヘーゲルは『法の哲学』〔*Grundlinien der Philosophie des Rechts*，1820 年刊〕において「形づくり」という言葉に言及しているが，その意味は，労働を介した領有によって，土地の所産あるいは自然的産物に手を加えて，それらを形づくることが占有と私的所有の基盤になるということである（vgl. § 54, § 56, § 196, § 203, § 204〔ヘーゲル，藤野渉・赤沢正敏訳『法の哲学』，中公クラシックス，2001 年，Ⅰ，180–181，184–185 頁，Ⅱ，116，124–129 頁〕）。

[i] この「原注 5 」は日本語版で追記された。

した。つまり歴史の歩みを，特定の契機や時期や時代に分解し，その歴史的時代の系列を一つの発展と見なし，各時代の独特な出来事の連関を，その時々の支配的制度との連関から理解しようとしたのである。フランスやスコットランドの啓蒙思想家のように，歴史の理論化は可能であり，世界史の経過には識別可能な意味や方向があると，マルクスもエンゲルスも主張した[6]。

〔2〕唯物論的な歴史把握と政治経済学批判

マルクスが再三再四抵抗したのは，自分の理論が，ヘーゲル的伝統にあって「唯物論的」に転倒された歴史哲学として読まれることであった。個人的書簡，時折公にされる態度表明，刊行された諸著作，そして『資本論』草稿やその準備作業において彼は，いかなる歴史哲学にも距離を置き，その決然たる離反をはっきり明言した。1857–58 年の草稿（「経済学批判要綱」〔“Grundrisse der Kritik der politischen Ökonomie”〕として知られているそれ）では歴史哲学的飛躍への警戒が何度となく記されている。そこで明らかにマルクスが逆らったのは，（歴史）哲学者や素人歴史家にかねてより愛好された，誤ったお決まりの描き方である。この描き方は，あらゆる歴史上の差異を抹消するか，あるいは，まとめて放擲するものとなり，こうして誤った抽象的契機が孤立させられると，「それによって現実的，歴史的な生産諸段階はどれも理解」されず，そもそも理解不可能となる。それゆえ，やみくもに書き散らす社会哲学者たちをマルクスが揶揄して述べるように，それは「空想をもてあそぶ決まり文句」の愛好にしかならない[7]。

それでも新しい歴史把握は「大きな理論」に留まっている。それは「中範囲」を超えている。この把握は，世界史の全体経過，その始まりから今日という「現代史」までの世界史の経過を理解させ，複雑な歴史的出来事さえも説明できる有益な手がかりを提供しようとする。このような「大きな」歴史理論は，いまだ歴史叙述ではないのだが，まずは歴史叙述においてその利用価値を証明しなければならない。マルクスは，今日的意味で歴史書とされる読み物をわずかしか書かなかった。たとえばフランスのその時々の「部分的現代史」である二つの労作 ——『フランスにおける階級闘争』〔*Klassenkämpfe in Frankreich 1848 bis 1850*〕と『ルイ・ボナパルトのブリュメール 18 日』〔*Der achtzehnte Brumaire des Louis Bonaparte*〕—— がある。また実際の政治的事件についてのいくつかの新聞論説がある。これらの論説で彼は，事態の前史に一定立ち入る自由を得たのであり，こうしてより詳細な歴史描写を公表したのだが，その好例が連続論説「革命のスペイン」〔“Revolutionary Spain”〕だ。さらに「18 世紀外交史の内幕」〔“Revelations of the diplomatic history of the 18th Century”〕についての歴史研究もある（これもまた連続論説であった）。そのほかにマルクスが政治経済史の進展について語らなければならなかった事柄は，『経済学批判』諸草稿とその準備作業に組み込まれている。そこに存命中に刊行された『資本論』の一部も含まれている。『資本論』においてマルクスは —— その長所も短所もあわせもつかたち

---

[6] 「理論的歴史」については次を参照。Phyllis K. Leffer, “The ‘Histoire Raisonée’ 1660–1720: A Pre-Enlightenment Genre”, *Journal of the History of Ideas*, vol. 37, no. 2 (1976): 219–240. また「理論的，推測的歴史」については次を参照。H. M. Hopfl, “From Savage to Scotsman: Conjectural History in the Scottish Enlightenment”, *Journal of British Studies*, vol. 17, no. 2 (1978): 19–40.

[7] 1857–58 年経済学草稿にたいする（死後に公刊された）序説の草稿を参照せよ（*MEW* 13, S. 618f, 620 und 616〔マルクス「〔経済学批判への〕序説」『全集』⑬，614–615，616，612 頁〕；*MEGA*^{2} II/1.1, S. 24f, 26, und 22〔マルクス「1857–58 年の経済学草稿」『草稿集』①，31，33，27 頁〕）。

で ──，たとえ特に重要だとはいえ，ただ一つの時代と歴史的生産様式だけしか取り上げなかった。すなわち近代資本主義である。だが彼の歴史理論が説明しようとする範囲は，これよりもさらに広大だ。その理論は一連の「経済的社会構成体の累進的諸時期」も，つまりマルクスによって 1859 年の『経済学批判』序言で[ii]「大づかみ」に名づけられた「アジア的，古典古代的，封建的および近代ブルジョア的」生産様式をも，十全に解明できるとされる[8]。

〔ドイツ語圏マルクス理論解釈の一派である〕「マルクスの新しい読み方」の支持者の意には大いに反することだが，マルクスの『資本論』全 3 部もその草稿と準備作業も，歴史に満ちあふれている。『資本論』第 1 部第 24 章「いわゆる本源的蓄積」だけでなく，随所に ── 全篇ばかりか全章にわたって ── 満ちあふれている。にもかかわらずマルクスの経済学批判が論ずるのは歴史哲学でも経済史でもない。それは一つの歴史的対象にかんする一貫して歴史的な著作であり，資本主義的生産様式の「運動法則」の研究だけでなく，なかんずくその「発展法則」の研究でもある。ここには資本主義の歴史もその前史も論じられていないが，その両方がマルクスの叙述には常に存在する。『資本論』で提示されるのは，大英帝国最盛期である 1860 年頃のヴィクトリア時代イングランドの産業資本主義研究ではないし，「純粋形態」として構成された資本主義の理念型にかんする説明でもない。マルクスは時に，地質学から借用した「理念的断面図〔idealer Durchschnitt〕」という比喩を用いた（これは 1864–65 年に書かれた『資本論』第 3 部第 1 草稿の終わりにある）が，この言い回しが指しているのは，地層を独特なかたちで描きだす提示法である。そこでは，経験的に地殻で見いだされる地層が，ある「理念的」順序に並べられるのであり，結果，連続する地質年代の順序と期間とが（「理念的」地層の厚さにもとづいて）図式的に簡略化されて再現される。こうして地球史の推移，その主要年代，そしてこれらの年代の相対的重要性についての地質学理論が描きだされる[9]。「マルクスの新しい読み方」の一部支持者はこの言い回しを真面目に受け取るものの，その意味についてはわかっていないようだ。もしこれを真面目に受け取るのであれば，そこから，マルクスも何か似たことを念頭に置いたと推論されうる。つまり資本主義の歴史が，理念化された（理念型として概念化された）年代継起として，その基礎範疇を叙述するさい組み込まれるのであり，これらの基礎範疇に表わされる諸関係に歴史があり，その関係の意味や重要性が，したがってその相対的位置さえも〔歴史とともに〕変化することが示されるのである。商品は単純商品ではないし，そうありつづけることもない。これと同様に貨幣は単なる貨幣ではないし，ましてや資本も賃労働もそうではない。マルクスが同時に解明

[ii] 「1859 年の『経済学批判』序言で」の文言は日本語版で追記された。

[8] *MEW* 13, S. 9〔マルクス「経済学批判」『全集』⑬，7 頁〕；*MEGA*^{2} II/2, S. 101〔マルクス「経済学批判。第 1 分冊」『草稿集』③，206 頁〕. そして，なぜに「後退する諸時期」でも，停滞する諸時期でもないのか？ここでマルクスは，依然としてスコットランド啓蒙思想の模範にならい，その〔歴史の〕四段階理論に公然と従っている。この理論によれば，人類の「進歩」は，狩猟採取段階から，現在（18 世紀のスコットランド社会）の「商業社会」へと至ったのである。

[9] 次を参照。*MEW* 25, S. 839〔マルクス，エンゲルス編「資本論　第 3 部」『全集』㉕，1064 頁〕；*MEGA*^{2} II/15, S. 805. 1851 年以来，マルクスは徹底的な地質学研究を行なっており，そこから「地質学的断面図」（あるいは地層断面図）とは何かを熟知していた。当時の教科書や手引きには「理念的断面図」（つまり図表化のために構成された地層断面図）が何度も話題にのぼっている（たとえば次を参照。Henry Thomas de la Beche, *Anleitung zum naturwissenschaftlichen Beobachten für Gebildete aller Stände, I. Geologie*, Berlin, 1836, S. 3 u.ö.）。マルクスが同時代の自然科学について多くを学んでおり，そこから方法論的にも専門用語上も拝借していることはよく知られており，資料によっても裏づけされている。

しようとしたのが，技術進歩や技術発展，あるいは蓄積に留まらず，「産業循環」（彼の言う景気＝恐慌循環という新現象）における「加速的蓄積」，つまりは近代資本主義のまったく独自な発展力学でもあったがために，事は複雑で厄介なものになる[10]。これは非常に野心的な研究計画である。マルクスがこの計画をその半分でも達成できたかどうかについては議論の余地がある[11]。しかし次の点だけは確実だ。歴史的時間と地政学的空間のなかにある経済的発展過程を解明する必要要素として理解されないのであれば，マルクスの価値論も，貨幣論も，賃労働論も，彼の経済学のいかなる部分も，まったく把握できない。ましてやその全体系については言うまでもない。

『資本論』第１部の最後の篇でも，これに先行する特殊資本主義的生産様式の発展の叙述でも，はたまた〔『資本論』第３部の〕未完の第１草稿第４篇（商人資本の歴史についての箇所），第５篇（信用と利子生み資本の歴史にかんする箇所），第６篇（土地所有の歴史についての箇所）でも見いだされるのは，多少なりとも練り上げられた資本主義の歴史描写である[12]。当時の政治経済学者は資本主義の起源にかんする神話をつくりあげていた（そして，この神話は部分的には今日までも続いている）。〔『資本論』第１部の最後の篇にある〕「いわゆる本源的蓄積」章で問題となるのは，この神話を —— 十分啓発的なかたちで —— 暴露し否定することにある。マルクスは

---

[10] ローザ・ルクセンブルク〔Rosa Luxemburg〕はマルクスの理論の特色を「資本主義的発展の理論」と的確に評した（Rosa Luxemburg, “Karl Marx”, in: Dies, *Gesammelte Werke, Band 1.2, Zweiter Halbband 1893-1905*, Berlin, 1970, S. 370）。ヨーゼフ・シュンペーター〔Joseph Schumpeter〕は，マルクスに触発されて，1911 年に初版を刊行した自身の資本主義の動態分析論に，『経済発展の理論』という表題をつけている（この表題でもって事実上，近代資本主義の発展のみが問題になっている）〔Joseph Schumpeter, *Theorie der wirtschaftlichen Entwicklung*, Berlin, 1911，シュムペーター，塩野谷祐一・中山伊知郎・東畑精一訳『経済発展の理論 —— 企業者利潤・資本・信用・利子および景気の回転に関する一研究』，岩波書店，1980 年〕。

[11] これを実現不可能な試みだとする見解がある。たとえマルクスの意図に反するとしても，資本主義分析が，〔第一に〕「理念的」資本主義の「純粋」理論，〔第二に〕資本主義的発展「段階」論ないしは「時局」論，そして第三に資本主義の歴史と，三つに分割された場合にのみ，マルクス理論は救われるというのだ。この見解は，宇野弘蔵によって 1945 年以降創設された日本マルクス主義の一派によって今日まで擁護されている。これは目新しいものではない。トゥガン＝バラノフスキー〔Mikhail Tugan-Baranowsky〕は早くも 1905 年に，マルクスの政治経済学批判にまったく異質な要素があると主張した。彼によれば，「抽象的な社会的および経済的理論」と「具体的歴史および資本主義の発展傾向の検討」とであり，そのそれぞれの「体系部分には，原則的に異質な性格がある」（Mikhail Tugan-Baranowsky, *Theoretische Grundlagen des Marxismus*, Leipzig, 1905, S. VI〔ツウガン・バラノウスキー，安倍浩譯『唯物史觀と餘剰價値』，天佑社，1922 年，２頁〕）。

[12] 理論主導的，分析的資本主義史の最も練り上げられた核心部分は『資本論』第１部に見いだされる。そこでマルクスは，〔第一に〕第 12 章と第 13 章で「大きな一般的な特徴」（*MEW* 23, S. 391〔マルクス「資本論　第１部」『全集』㉓，486 頁〕；*MEGA*^{2} II/10, S. 333）に限定されるものの，マニュファクチュアと大工業の発展にかんする「歴史的素描」を提示する。〔第二に〕その前にある第８章で彼は，標準労働日をめぐる闘争史を，つまりイングランドでの工場立法と労働者保護立法の始まりを描きだす（*MEW* 23, S. 258–320〔同前，317–398 頁〕；*MEGA*^{2} II/10, S. 218–272）。哲学的に仕上げられたマルクス像，あるいは新たにヘーゲル化されたマルクス像を支持する者にとっては，このマルクスの資本主義分析の二つの核心部分は前々からの悩みの種であった。彼らは，これらの叙述を，「歴史的」であるがゆえに余分なくだりだと見なし，概念導出の美しい展開を乱す単なる例証だと考える。これはまったくの的外れであって，マルクス＝レーニン主義におけるこの両核心部分の〔別の〕誤読にたいする反応としてさえも受け入れがたい。マルクス＝レーニン主義はといえば，この叙述を歴史的な段階論的発展と誤って捉えてしまう（つまり第一に絶対的剰余価値生産，第二に相対的剰余価値生産が順に出現するとされる）。それでもマルクスは明確に「マニュファクチュア時代」と「大工業時代」とを区別している。この時代区分が，資本主義の歴史全体の分析にあたって，いかなる利用価値をもつかについては，意見が分かれるであろう。

「本源的蓄積」の神話に対置するかたちで，一部西ヨーロッパ諸国の資本主義の創生過程をまさに描きだす。『資本論』第 1 部ドイツ語第 2 版，そしてフランス語版で彼は，その都度，この描写の記述をかなり増やしていった。しかし，この増やされた記述であっても，それは依然として一つの素描でしかない。確かに，これによって，資本主義の歴史を理解できる手がかりが与えられるものの，その歴史そのものが示されるわけではない。ただしマルクス自身，慎重さを欠いて，この章の最後に，資本主義の終焉にかんする一節（名高い第 7 節「資本主義的蓄積の歴史的傾向」）を挿入したがゆえに，政治的，歴史哲学的な『資本論』読解への扉を自ら開いてしまった[13]。

だがマルクスは，歴史哲学的解釈には明確に異議を唱えていた。1877 年 11 月，彼は自分の理論への批判に反駁しようと手紙の下書きを書いている。ロシアの政治文学雑誌『オテーチェストヴェンヌィエ・ザピスキ〔祖国雑記〕』〔*Отечественные записки*（*Otetschestwennyje Sapiski*）〕10 月号に，マルクスにたいする批判文書が掲載されたのである。そこに書かれた次の見解にたいしてマルクスは抗弁した。

> 〈かの批判家は〉西ヨーロッパでの資本主義の創生にかんする私の歴史的素描を，〈……〉あらゆる民族が，いかなる歴史的事情のもとに置かれていようとも，不可避的に通らなければならない普遍的発展過程の歴史哲学的理論に転化〈しようとしています〉。

マルクスが賛同するのは，「異なる歴史的環境」を考慮するような，歴史的（そして同時代史的）発展の正確な比較研究である。最も複雑な現象にたいしても矛盾なき歴史的説明はありうるかもしれないが，「超歴史的なことがその最高の長所であるような普遍的歴史哲学理論という万能の合鍵でもって」それは行なわれるものではない[14]。これは，あたかも「導きの糸」── 自分自身の歴史理論 ── にたいする否定にも聞こえるが，1870 年代中盤の彼の研究状況と関連づけられれば適切な意味を帯びている。

〔その時期にあたる 1872–75 年に刊行された〕『資本論』第 1 部フランス語版でマルクスは，自分の一般理論の有効性を，いっそう明確に西ヨーロッパ諸国に限定する。少なくとも西ヨーロッパ諸国であれば，イギリスの工業化の範に従うのである。と同時に，資本主義的発展が経過する型や模範国が多様にあることも強調される。その時点（〔『資本論』第 1 部ドイツ語初版が出版された〕1867 年ないしは 1872–75 年）であればイギリスが資本主義的生産様式の「典型的場所」なのかもしれないが，常にそうであったわけではない。つまり資本主義的発展の他の「模範国」が先行した。17 世紀，商人資本が絶頂を迎えた時代には，オランダが「典型的な資本主義国」あるいは「ちょうど今日のイギリスのように経済的発展の模範国」であった[15]。イタリア，ポル

---

[13] 次を参照。*MEW* 23, S. 789–791〔同前，993–996 頁〕；*MEGA*^{2} II/10, S. 683–685．この節の叙述への組み込みが賢明であったか否かについては議論の余地があろう。

[14] Karl Marx, “[Brief an die Redaktion der „Otetschestwennyje Sapiski“]”, in: *MEW* 19, S. 111/112〔マルクス「[『オテーチェストヴェンヌィエ・ザピスキ』編集部への手紙]」『全集』⑲，116–117 頁〕；*MEGA*^{2} I/25, S. 116/117. この反論をマルクスは郵送しなかった。それは彼の死後，1887 年に公表された。

[15] *MEW* 23, S. 779〔マルクス「資本論　第 1 部」『全集』㉓，981 頁〕；*MEGA*^{2} II/10, S. 674; *MEW* 25, S. 616〔マルクス，エンゲルス編「資本論　第 3 部」『全集』㉕，777 頁〕；*MEGA*^{2} II/15, S. 592. マルクスによれば，オランダでは商業取引，貨幣取引，商業信用，マニュファクチュア，植民地制度，国債制度（すなわち公信用

トガル，スペイン，フランドル地方にも，資本主義的発展で先行した類似の全盛期があったのであり，マルクスによれば，ある資本主義国〔の活動〕が，他の国家の資本主義的事業への「融資」に限られるようになると，その没落のまぎれもない兆候だと見なされる（ヴェネツィア，ジェノヴァ，次いでポルトガル，最後にオランダの場合がそうであった）。ただし以上のようにそもそも言えるのは，少なくとも，近代資本主義の歴史的発展経過というものが表象される場合だ。そうすれば，その発展の絶頂期が定められ，つまり「それぞれの契機を，それが十分に成熟し典型的形態をもつに至った発展時点で考察」できるようになる[16]。しかしまた，マルクスが1877年に示唆したように，「第1次，第2次，第3次というような型の全系列」[17]が —— その他の生産様式や社会形態と同じように —— 資本主義の歴史にも存在すると大胆に思い浮かべることもできる。

したがって，資本主義社会も，工業化の道も，資本主義の発展段階や時代順序も，一つだけではなく複数あるということを，マルクスは理解していた。近代資本主義の一連の型・亜型を分類したり，多様な典型や模範国を区別したりすることは有意義であろう。資本主義の分析的歴史を書こうとする者は，アダム・スミス〔Adam Smith〕やジェイムズ・ステュアート〔James Steuart〕のように比較政治経済学に取り組まなければならない。古典派経済学者にはわずかしかなかった高度な「歴史感覚」が必要となるのだ[18]。

マルクスの『資本論』草稿は，方法論にかんする付随的覚書や欄外注に満ちあふれているが，それも自分自身に語りかける研究草稿なのだから当然である。だが『資本論』第1部にさえ，このような類いの所見が，洗練された鋭利な文体で記されている。たとえばマルクスは，道具の結合として機械を規定する（ヴィルヘルム・シュルツ〔Wilhelm Schulz〕その他の）過去の研究を批判する。経済学的観点からすれば，この説明は役に立たない。というのも「それには歴史的な要素が欠けているからである」[19]。歴史的痕跡も歴史的要素も欠けているのであれば，対象に適した経済学的概念は形成できない。このことが，『資本論』に示される理論全体に適用される。経済学的概念の歴史的要素を把握するためには，完全な経済史とまではいかなくとも，最近の（そして過去の）工業史，貨幣史，市場史，土地所有史などの「根本的諸特徴の分析」[20]は必要と

制度），そして海上貿易に伴う国際信用全般が，最も広範に発達していたという。

16　このようにエンゲルスは1859年の『経済学批判』の書評で定式化する。この書評は今日，軽視されている（もっともマルクスはこの文章を認めており，ともかくも非学術的な読者を対象とした書評であった）（*MEW* 13, S. 475〔エンゲルス「〔書評〕カール・マルクス『経済学批判』」『全集』⑬，477頁〕）。

17　Karl Marx, “[Entwürfe einer Antwort auf den Brief von V. I. Sassulitsch]: [Erster Entwurf]”, in: *MEW* 19, S. 386〔マルクス「［ヴェ・イ・ザスーリチの手紙への回答の下書き　第1草稿］」⑲，388頁〕；*MEGA*^{2} I/25, S. 229. マルクスが最終的に送った手紙には，この区別について何も書かれていない（vgl. *MEW* 19, S. 242/243〔マルクス「［ヴェ・イ・ザスーリチへの手紙］」『全集』⑲，238–239頁〕；*MEGA*^{2} I/25, S. 241/242）。

18　それゆえ資本主義の発展過程についてのさらなる示唆が，政治経済学の理論史にかんする数々の解釈記述（断片的で部分的にしか仕上げられていない叙述）に見いだされるのも偶然ではない（たとえば『経済学批判』における学説史にかんする諸節であり，1861–63年経済学草稿の学説史部分であり，『資本論』第1部にある数々の —— しばしばかなり長文の —— 脚注である）。

19　*MEW* 23, S. 392〔マルクス「資本論　第1部」『全集』㉓，486頁〕；*MEGA*^{2} II/10, S. 333.

20　この的確な定式は次の文献に由来する。Friedrich Engels, “[Rezension des Ersten Bandes „Das Kapital“ für den „Gewerbeblatt aus Württemberg“]”, in: *MEW* 16, S. 229〔エンゲルス「［『ゲヴェルベブラット・アウス・ヴュルテンベルク』のための『資本論』第1巻書評］」『全集』⑯，227頁〕；〔なおこの書評の掲載誌名は *MEGA*^{2} では次のように訂正されている。〕Ders., “[Rezension des Ersten Bandes „Das Kapital“ für den „Staats-

なる。しかもマルクスは，これらの特徴を，まったく体系的に正確に位置づけて示そうとする。資本の種差〔differentia specifica〕を規定しようとすれば，さらに言えば貨幣や信用や商業の種差を把握しようとすれば，これらは「交換の発展と〈……〉交換にもとづく生産の発展」から生じるのだから，誰であろうと少なくとも，その発展経過を表象しなければならない。マルクスが折に触れて書き記すように，種差の規定は「論理的な展開〔Entwicklung〕でもあれば，歴史的な発展〔Entwicklung〕の理解のための鍵」にもなりうる[21]。しかしながら，この「論理的な展開」，すなわち，ここにおいて歴史的種差（前資本主義的生産様式との関連での種差，および資本主義的生産様式内部にある種差）を追究する詳細な概念規定は，この歴史的発展についてのすでに理論化された（仮説的かつ分析的な）表象を前提とする。

別の一例を挙げてみよう。『資本論』第 1 部に目を戻せば，その第 4 章でマルクスは，労働市場における労働力販売者として「自由な賃金労働者」を導入するが，ここでまったく思いがけず「世界史」という言葉が姿を現わす。マルクスの主張によれば，貨幣が資本に転化できるのは，貨幣所持者や潜在的資本家が「自由な労働者」を，したがって「労働力という商品」を，市場で見いだすという条件のもとにおいてのみである。そして彼はこう続ける。

> 〈……〉この一つの歴史的な条件が一つの世界史を包括している。それだから，資本は，初めから〈……〉一つの時代を告げ知らせている。[22]

1857–58 年の経済学草稿や，その後の時代の諸草稿では，近代的賃労働の出現というこの「世界史」についての示唆が多数見いだされる。貨幣や市場と同じく，自由な賃金労働者もまた資本のために存在する。つまり資本主義的生産様式が資本ばかりか賃金労働者をも生みだす以前にあって，資本は賃金労働者を，萌芽的な労働市場とともにその眼前に見いだすのである。

このことは政治経済学の他の諸範疇にも —— 最も単純かつ抽象的な範疇にも，また最も複雑で具体的な範疇にも —— 当てはまる。これらの範疇は，一つの痕跡，あるいはむしろ複数の「歴史的痕跡」を常に帯びるのであり，商品，貨幣，交換（あるいは市場）といった範疇のなかにも同じように，一千年にわたる世界史が存在している。当然ながら，商品，貨幣，交換（ないしは流通）のマルクス的概念には歴史的意味があり，当然ながら歴史があり，そして当然ながら，資本主義的発展が進むなかで，そのそれぞれの形態規定も変化する。商品は，マルクスによってまずは資本主義社会の富の「原基形態」として，そして資本の基本的前提条件として把握されるが，こうした商品は，資本主義的生産過程から「資本の生産物」として市場に出される商品とは明確に区別される。マルクスが，1863–64 年草稿（その第 6 章「直接的生産過程の諸結果」の結語）で特に強調するように[23]，この二つの商品は物質的にも形態的にも異なるのである。二つの商品

Anzeiger für Württemberg“]”, in: *MEGA*^{2} I/21, S. 41.

[21] Karl Marx, *Grundrisse der Kritik der politischen Ökonomie*, in: *MEW* 42, S. 573; *MEGA*^{2} II/1.2, S. 554〔マルクス「1857–58 年の経済学草稿」『草稿集』②，442 頁〕.

[22] *MEW* 23, S. 177f, 184〔マルクス「資本論　第 1 部」『全集』㉓，213 頁以下，ならびに 223 頁〕；*MEGA*^{2} II/10, S. 148f, 155．したがって，『経済学批判』第 1 草稿（断片的にしか保持されておらず「原初稿」と呼ばれる草稿）に取り組んだ 1858 年に獲得した自分の認識をマルクスは踏襲している。すなわち「弁証法的形態で叙述することは，それ自体の限界をわきまえている場合にのみ正しい」（*MEGA*^{2} II/2, S. 91〔マルクス「経済学批判。原初稿」『草稿集』③，194 頁〕）。

の区別は，一つの歴史画期的な移行を示す。すなわち商品取引（「発達した商品流通」と一定完全に「発達した」商品生産形態とを含むそれ）から，そして「16 世紀の資本の近代的生活史」の始まりとなった「世界貿易と世界市場」（『資本論』第 1 部で明白に「歴史的」と言われているもの[24]）から，工業的に発展し，歴史的に特殊な生産様式を用いるような，徹底的に資本主義的な商品生産への移行である[25]。もし，これらの要素（あるいは原基形態）が，経済過程（交換過程，生産過程，再生産過程）の諸契機として連関のなかで理解されるのであれば，これらは歴史を有するのであり，その歴史はまた資本主義の長期の歴史の一部であるとともに，世界市場の広大な歴史の一部でもある（その世界市場において，数多に共存する生産・交換様式の行為主体が —— 時に友好的に，時に好戦的に —— 遭遇しあう）。しかしながらマルクスが自らに課した叙述の問題は，満足あるかたちでは解決されず，あちらの「弁証法的形態」，こちらの「弁証法的形態」と変転しつづけたのである。

〔3〕マルクスによる世界史研究

マルクスは 1880 年にもう一度，自らの理論的企図を定式化している。すなわち彼の望みは「批判的，唯物論的な社会主義に道をひらくことであり，それは社会的生産の現実の歴史的発展を理解せんとするものである」[26] と。マルクスは，この企図から外れることがなかった。その目標は，社会主義運動に，政治哲学ではなく，確固たる社会科学的基盤を授けることにあった。

こう書いてから間もなくして，マルクスは 1881 年から 82 年にかけて，世界史の経過にかんする抜粋で埋め尽くされた 4 冊のノートを書いている[27]。ここで取り上げられるのは 4 冊の学校

23　次を参照。*MEGA*^{2} II/4.1, S. 24 und 33/34〔マルクス，森田成也訳『資本論第 1 部草稿　直接的生産過程の諸結果』，光文社古典新訳文庫，2016 年，116–117，128–132 頁〕.

24　*MEW* 23, S. 161〔マルクス「資本論　第 1 部」『全集』㉓，191 頁〕；*MEGA*^{2} II/10, S. 134．エンゲルスはその解釈の点でさほど誤っていなかったと，マルクス自身が『資本論』第 1 部で語っている。つまり労働生産物が商品へと大量に転化するのは，一定の歴史的前提条件のもとでのみなのである。すなわち社会内部での分業がかなり十分に発展し，「最初は直接的物々交換に始まる使用価値と交換価値との分離がすでに実現されている」場合だ。しかし「このような発展段階は〈……〉歴史的に非常に違ったいろいろな経済的社会構成体にも共通する」（*MEW* 23, S. 184〔同前，222 頁〕；*MEGA*^{2} II/10, S. 155）。また 1857–58 年の経済学草稿には次のようにある。「純粋性と一般性」における価値規定は，「社会的生産様式の」一定の「歴史的段階」をその前提としており，「それ自体その生産様式とともに与えられた，したがって歴史的な関係なのである」。だが，これは事柄の一面である。「他方，価値規定の個々の諸契機は，社会の歴史的生産過程のより早い段階に発展し，その結果として現われる」（Karl Marx, *Ökonomische Manuskripte 1857/1858*, in: *MEW* 42, S. 177; *MEGA*^{2} II/1.1, S. 174f〔マルクス「1857–58 年の経済学草稿」『草稿集』①，292 頁〕）。

25　価値形態，あるいは価値形態の展開は，最新の「マルクスの新しい読み方」の信奉者が好んで使う議論であるが，この価値形態の展開にも同じことが言える。ここでもまた力の限りマルクスは「歴史化」する。1870 年代のマルクスの人類学抜粋ノートにおいて，より原初的な価値形態が —— 最も単純な交換関係の考察にさいして —— 再び書かれるのだが，これは偶然ではない。

26　Karl Marx, “[Über „Misère de la philosophie“]”, in: *MEW* 19, S. 229〔マルクス「[『哲学の貧困』について]」『全集』⑲，226 頁〕；Ders., “La Misère de la philosophie. Avant-propos de 1880”, in: *MEGA*^{2} I/25, S. 198.

27　1934 年に刊行されたマルクスの年代記では，確かに 1879 年冬から 80 年にかけて古代ローマ史研究をマルクスが新たに行なったとある（次を参照。Marx-Engels-Lenin-Institut Moskau, *Karl Marx: Chronik seines Lebens in Einzeldaten*, Moskau, 1934, S. 375）。しかしながら，これに続く世界史研究とその抜粋については言及がない。ハル・ドレーパー〔Hal Draper〕は，その著書『マルクス＝エンゲルス年代記』において，これに

ノート，つまりドイツ規格 A5 版の筆記帳である。それらは，がっちりとした大理石模様の厚紙表紙と黒い布で装丁され，各ページには青色の罫線が引かれ，みっちりと書き込まれている。エンゲルスはこのノートに長方形のラベルを糊で貼りつけて，そこに手書きで次の表題を記した。

「年代記抜粋　Ⅰ　96 年からおよそ 1320 年まで〔Chronologische Auszüge I, 96 bis + 1320 ca.〕」
「年代記抜粋　Ⅱ　およそ 1300 年からおよそ 1470 年まで〔Chronologische Auszüge II, ca. 1300 bis c. 1470〕」
「年代記抜粋　Ⅲ　およそ 1470 年から 1580 年まで〔Chronologische Auszüge III, ca. 1470 bis 1580〕」
「年代記抜粋　Ⅳ　およそ 1580 年からおよそ 1648 年まで〔Chronologische Auszüge IV, ca. 1580-ca. 1648〕」

4 冊のノートは，マルクスの手で書きこまれている（状態の良い羽ペンを使ったため比較的読みやすくはある）。抜粋と折に触れての論評とが，マルクスの研究作業に特徴的な多言語混合状態で —— 主にドイツ語だが，そこに英語，ラテン語，イタリア語，フランス語，スペイン語，そのうえ若干のロシア語までも混じるかたちで —— 書かれている。これらのノートは，アムステルダム国際社会史研究所のマルクス＝エンゲルス遺文庫に保管されている[28]。この抜粋覚書の大部分が未発表のものであり，今後『新マルクス＝エンゲルス全集』〔*MEGA*[2]〕第Ⅳ部（第Ⅳ部第 29 巻）として公刊される予定だ。

これらの抜粋において問題となるのは同時代の二人の歴史家の著作である。一つは，カルロ・ジュゼッペ・グリエルモ・ボッタ〔Carlo Guiseppe Guglielmo Botta〕による『イタリア人民の歴史』〔*Histoire des peuples d' Italie*〕であり，もう一つは，フリードリヒ・クリストフ・シュロッサー〔Friedrich Christoph Schlosser〕の『ドイツ人民のための世界史』〔*Weltgeschichte für das deutsche Volk*，以下『世界史』〕である。前者は 1825 年にパリで 3 巻本として出版された。後者はフランクフルト・アム・マインで 1844 年から 57 年にかけて刊行され，当初は 6 巻本であったのが，最終的には 18 巻にもわたるものとなった。マルクスの第 1 ノートはボッタの著作から，残りの 3 冊はシュロッサーのものからの抜粋を含んでいる。

1817 年以来，ハイデルベルク大学歴史学教授を務めたシュロッサーは，ドイツ人歴史家のなかでも実に成功した著作家であった。彼はフランクフルト・アム・マインで 1815 年から 24 年に『総合物語としての世界史』〔*Weltgeschichte in zusammenhängender Erzählung*〕全 9 巻を出版したが，これをきっかけにシュロッサーは，既知の歴史的事実全体の総合叙述という野心的試みに着手した。彼の世界史の 18 巻本版は，ドイツでは 27 刷にもなり，第 1 次世界大戦直前まで普及したが，その相当部分は彼の弟子であったゲオルク・ルートヴィヒ・クリーク〔Georg

---

触れており，その研究時期を「おおよそ 1881 年末から 82 年末」と位置づけている（Hal Draper, *The Marx-Engels Chronicle: A Day-by-Day Chronology of Marx and Engels' Life and Activity*, New York, 1985, p. 220）。

[28] 次の所蔵資料を閲覧せよ。アムステルダム国際社会史研究所マルクス＝エンゲルス遺文庫〔IISG Amsterdam, Marx-Engels-Nachlass〕（以下「IISG, MEN」と略記），Sign. B 108/B 157, B 109/B 158, B 110/B 159 und B 111/B 160.

Ludwig Kriegk〕の手で，シュロッサーの過去の研究と講義録から編集されたものである[29]。マルクスはドイツの学問文献を丹念に追っており，彼自身，同時代の一著名歴史家に関わらなければならないと気づいていた。このシュロッサーという人物は，極度に観念論的な歴史解釈を信奉しており，辛辣な主観的評価をくだすことも厭わなかった[30]。マルクスは「年代記抜粋」に取り組む以前から，シュロッサーの著作を知っており活用もしている。この点は，デューリング〔Eugen Dühring〕の『国民経済学と社会主義の批判的歴史』〔*Kritische Geschichte der Nationalökonomie und des Socialismus*〕に関わる一章をマルクスが準備したさい，2度にわたって簡潔ながらも好意的に，シュロッサーに言及したことに表われている。この一章は後にエンゲルスの『反デューリング論』〔*Anti-Dühring*〕に組み込まれたが，そのさいマルクスは，デヴィッド・ヒューム〔David Hume〕にたいするデューリングの慇懃無礼かつ傲岸な言葉にたいして，シュロッサーのヒューム評を引用したさい，〔最初の〕覚書では「ヒュームを熱愛した尊敬すべき老シュロッサー」，さらに後の手稿では「立派な老シュロッサー」と書いている[31]。こうしてドイツの非学術的読者層ないしは半学術的読者層向けの一文にマルクスが書き記したのは，実際，古くからよく知られたこの人物の名前だけであった。シュロッサーは，教養渇望層にも教養層にも広く読まれ尊敬された家庭図書の著者であったからである。

ボッタは医学を学び，軍医として活動し，フランス革命の断固たる支持者となったのち，ボナパルト派となった人物である。彼はアメリカ独立戦争史の一著を執筆し，イタリア史に関連する複数の著作を刊行した。まず5巻本で出版された『1789–1814年のイタリア史』〔*Storia d' Italia dall 1789 al 1814*〕（〔出版地〕パリ，1824年刊），次にマルクスの抜粋対象となった『イタリア人民の歴史』，さらに『グイチャルディーニの歴史書以降の1534–1789年のイタリア史』〔*Storia d' Italia continuata da quella del Guicciardini dall 1534 sino al 1789*〕全10巻（パリ，1832年刊）である。ボッタの『イタリア人民の歴史』はマルクスの蔵書にあり，その自家用本の欄外にはいくつもの書き込みがある[32]。シュロッサーの『世界史』の自家用本をマルクスが所持してい

---

[29] 次を参照。Michael Gottlob, "Friedrich Christoph Schlosser (1786–1861): Weltgeschichte für das deutsche Volk", in: Volker Reinhard (Hrsg.), *Hauptwerke der Geschichtsschreibung*, Stuttgart, 1997, S. 574–577. シュロッサーの『世界史』は，さらに有名な彼の『18，19世紀の歴史』〔*Geschichte des 18. und 19. Jahrhunderts*〕（1823年刊）とともに，フランス語，英語，ロシア語，オランダ語，スペイン語に翻訳された。

[30] シュロッサーは，かつては，ドイツの非政治的書斎派研究者の典型とされていたが，当時各地で支配的であったナショナリズムに引きずられなかった点については積極的に評価されなければならない。シュロッサーの人生とその著作については次を参照。Michael Gottlob, *Geschichtsschreibung zwischen Aufklärung und Historismus: Johanna von Müller und Friedrich Christoph Schlosser*, Frankfurt a. M., 1989.

[31] *MEGA*^{2} I/27, S. 144 und 197. 公刊された文章には，さらに簡潔に「老シュロッサー」とだけ書かれている（ebenda, S. 417; *MEW* 20, S. 226〔エンゲルス「オイゲン・デューリング氏の科学の変革（反デューリング論）」『全集』⑳，252頁〕）。

[32] マルクスとエンゲルスの蔵書の「情報取得作品目録」では，マルクスの所持していたボッタの『イタリア人民の歴史』が次のように描かれている。

> 最初の2巻には，マルクスの手で（青鉛筆，鉛筆，そしてインクで）いくつもの線が引かれ，ドイツ語，英語，フランス語での書き込みがある。ページの余白には，暦年数や歴史的事実に関わる覚書があり，また本文内容にたいする補足・評価もいくつか見うけられる。（Bruno Kaiser et al., *Ex libris Karl Marx und Friedrich Engels: Schicksal und Verzeichnis einer Bibliothek*, Berlin, 1967, S. 36f.）

たことも，今では解明されている。蔵書調査目録にあるように，シュロッサーの『ドイツ人民のための世界史』── 1846–48 年にフランクフルト・アム・マインで刊行されたその初版第 2 刷全 6 巻 ── が，マルクスの書庫，すなわち「推定マルクス文庫」にはあったのである[33]。さらにマルクスは，1864 年に亡くなった友人ヴィルヘルム・ヴォルフ〔Wilhelm Wolff〕からシュロッサーの『世界史』19 巻本を譲り受けたと思われる[34]。

1950 年代にヴォルフガング・ハーリヒ〔Wolfgang Harich〕が，ドイツ史についての古典選集を編纂した。マルクス，エンゲルス，レーニン〔Владимир Ленин（Vladimir Lenin)〕，スターリン〔Иосиф Сталин（Joseph Stalin)〕の文献がその古典とされた。この選集の第 1 巻[iii] には，マルクスのシュロッサー抜粋から選ばれた文章が含まれているが，それはとりわけ第 4 ノートの「ドイツ史」のものに集中している[35]。マルクスの抜粋（第 3 ノートと第 4 ノート）から選びとられたこれらの文章は抜粋全体の 6 分の 1 にも満たないが，そこでは 16 世紀と 17 世紀前半のドイツ史上の事件や人物が取り上げられる。そこで問題となるのは，政治であり，権力闘争であり，大小さまざまな権力者の台頭と凋落であり，大小さまざまな国家の行動である。立法，行政活動，さまざまな改革，戦争，講和，通商関係であり，王朝の勃興と没落，国家と帝国の創設，興隆，没落である。さらには外交，条約，締結書であり，宗教，なかでも世俗的，政治的勢力としての教会であり，宗教改革と反宗教改革である。マルクスの言葉を使えば「資本と国王との闘争」であり，要するにヨーロッパにおける国家形成という長く込み入った過程が問題なのだ[36]。マルクスは折に触れて，参照指示や書き込みによって，後の展開を前もって示したり，過去の出来事に回帰したりするものの，〔ハーリヒが収録した〕これらの抜粋は明確に区分され，年代順に配置されている。また公刊されたものには，マルクスの手による論評がほんのわずかしか載っていない。マルクスは適宜，シュロッサーの事実誤認を訂正している。マルクスが論評するさいには，複雑な長期の発展（たとえば経済的に関連するか影響するかする政治的発展，あるいは政治的紛争の経済的前提ないしは経済的背景）が要約されるか，一定の出来事が重視されて彼なりに解釈しなおされる。

ただしローラント・ダニエルス〔Roland Daniels〕によって 1850 年に作成されたマルクスの蔵書目録には，ボッタもシュロッサーも言及されていない。したがってこれらの本は後年，取得されたのである。

33　次を参照。“Die Bibliotheken von Karl Marx und Friedrich Engels: Annotiertes Verzeichnis des ermittelten Bestandes”, in: *MEGA*^{2} IV/32, S. 586f. そこにはボッタの『イタリア人民の歴史』も再度，記載されている（S. 158)。

34　Vgl. Christian Gottfried Nees von Esenbeck und Carl Georg Althusen, “Dokumentation zur Bibliothek von Wilhelm Wolff”, in: *Beiträge zur Nachmärz-Forschung*, Schiriften aus dem Karl-Marx-Haus, 47, Trier, 1994, S. 193 und 230.

iii　原著には「第 4 巻」とあったのを訂正した。

35　次を参照。*Marx, Engels, Lenin, Stalin zur deutschen Geschichte: Aus Werken, Schriften, Briefen. In drei Bänden, Besorgt vom Marx-Engels-Lenin-Stalin-Institut beim ZK der SED, Band I: Von der Frühzeit bis zum 18. Jahrhundert,* Berlin, 1953. ヴォルフガング・ハーリヒの名が編集責任者として記載されている。

36　したがってマルクスによれば，国家形成過程は，近代資本主義の出現・発展と直接，歴史的に連関されて理解されたと推測されるが，このこともあながちこじつけではない。

〔4〕1843-82年のマルクスによる歴史研究[37]

われらが著者〔マルクス〕は1843年からその人生の最後に至るまで世界史研究とその準備作業とを続けたが，シュロッサー抜粋は，この一連の作業の最後を飾るものでしかない。こうした研究を便宜的に「歴史」研究と名づけるが，それはマルクスの経済学研究の進展と密接につながっている。言い換えれば，ヨーロッパ内外にわたるマルクスの包括的歴史研究，詳しく言えば政治史，法制史，経済＝社会史，文化史，技術史，そして科学史にわたる彼の歴史研究全体が，近代資本主義にたいする政治経済学的分析を構築する基盤なのである。

マルクスは，〔1818年に生まれたのち，その出生地である〕トリーアのギムナジウムで良質な歴史の授業を受けた。ボンとベルリン〔の大学〕では法律学を学び，ローマ法制史，中世法制史，近代法制史について多くの講義を聴講した。若きジャーナリストとなったさい，彼がすぐに自覚したのは，経済的時事問題を語るには自分の知識は不十分だという点であった。彼は，この知識不足を熱心な研究でもって解消しようとした。政治経済学も，経済＝社会史もマルクスは独力で学んだ。もっとも法制史は別であった。マルクスの大学時代の研究については断片的記録しかなく，われわれの手元には学生時代に作成された若干の抜粋しかない。芸術史についての抜粋しか残されておらず，法制史その他の抜粋は失われている[38]。1843年冬から1844年にかけて，マルクスは政治経済学研究に着手し，まずは自分がまだ知らなかった —— つまり，それまでにヘーゲルの著作で〔概要を〕知ったか，名前しか知らなかった —— フランス，イギリスの政治経済学の著名理論家に没頭した。セイ〔Jean-Baptiste Say〕，ミル〔James Mill〕，スミス，リカード〔David Ricardo〕，マカロック〔John Ramsay McCulloch〕，そして最後にフリードリヒ・エンゲルスである。その後まもなくして1846年9月になると，グスタフ・フォン・ギューリヒ〔Gustav von Gülich〕による壮大な経済史を研究しはじめ，その抜粋を行なっている。1830年から1845年にかけて5巻本としてイェーナで刊行された『現代主要産業国の商業・工業・農業の歴史叙述』〔*Geschichtliche Darstellung des Handels, der Gewerbe und des Ackerbaus der bedeutendsten handeltreibenden Staaten unserer Zeit*〕である。ギューリヒの本は，マルクスの時代の基本文献であり，ワイマールの枢密顧問官ゲーテ〔Johann Wolfgang von Goethe〕など，あらゆる教養人が読んでは活用していた[39]。マルクスは1846年9月から1847年12月にかけて，ギューリヒの歴史書を手元に常に置きながら，経済史，金融史，社会史の独学を熱心に続けたが，

---

[37] ハンス＝ペーター・ハースティック〔Hans-Peter Harstick〕は，土地の共同体所有にかんするM・M・コヴァレフスキー〔Максим М. Ковалевский（Maksim M. Kovalevskij)〕の著作についてのマルクスの抜粋を出版したさい，その「付録Ⅰ」で，歴史科学分野でのマルクスの研究対象について卓抜した網羅的記述を提供している。そこには，マルクスの完璧な読書目録がある（抜粋されたものだけでなく欄外書き込みのみ残された本も含まれている）（vgl. Hans-Peter Harstick (Hrsg.), *Karl Marx über Formen vorkapitalistischer Produktion*, Frankfurt/New York, 1977, S. 233-263)。私は，1881-82年の（新たな）世界史研究の理解に関わるものに限って，当該時期におけるマルクスの研究の一部に立ち入ることにする。

[38] ボンならびにベルリン時代のマルクスの哲学・芸術史研究についての現存記録文書は，*MEGA*^{2}第Ⅳ部第1巻ですでに公刊されている。

[39] 1830年6月16-17日にヨハン・ヴォルフガング・フォン・ゲーテは自分の日記に次のように書いた。「その後，グスタフ・フォン・ギューリヒの商業の歴史叙述を手にした。〈……〉私は〈マイヤーとの会話で〉グスタフ・フォン・ギューリヒの商業史云々を称賛した。この本から得た多くのことを彼に語り伝えた」（*Goethes Werke, III. Abtheilung: Goethes Tagebücher, Band 12: 1829-1830*, Weimar, 1901, S. 257, 258)。

これによってマルクスは，さらなる仕事を可能にする確固たる基盤を得た[40]。

この時期の前後にマルクスは政治史研究にも没頭した。まずクロイツナハ滞在期，そしてパリ滞在期に近代フランス政治史を研究した。彼はクロイツナハで 1843 年 7 月から，フランス史その他のヨーロッパ各国史に徹底的に取り組んでから，「国民公会史」の執筆計画を放棄した[41]。当時，広範に知られた名高い基本文献に彼が手を出したのも偶然ではない。それは，ゲッティンゲン大学歴史学教授であったアルノルト・ヘルマン・ルートヴィヒ・ヘーレン〔Arnold Hermann Ludwig Heeren〕とゴータの地理学者フリードリヒ・アウグスト・ウケールト〔Friedrich August Ukert〕によって 1819 年から 30 年にかけて編纂された複数巻の『ヨーロッパ各国史』〔*Geschichte der europäischen Staaten*〕である。この著作集からマルクスは，アレクサンダー・シュミット〔Ernst Alexander Schmidt〕の『フランス史』〔*Geschichte von Frankreich*〕，エリック・ガイヤー〔Erik Geijer〕の『スウェーデン史』〔*Geschichte Schwedens*〕，ヨハン・マルティン・ラッペンベルク〔Johann Martin Lappenberg〕の『イングランド史』〔*Geschichte von England*〕，ヴィルヘルム・ヴァクスムート〔Wilhelm Wachsmuth〕の『革命時代のフランス史』〔*Geschichte Frankreichs im Revolutionszeitalter*〕，ヨハン・クリスティアン・フィスター〔Johann Christian Pfister〕の『ドイツ史』〔*Geschichte der Teutschen*〕を研究した。これに加えて，フランス史，イギリス史，ポーランド史，ドイツ史についてのさらなる書籍や論文にも取り組み，ピエール・ダリュ〔Pierre Daru〕の『ヴェネツィア共和国史』〔*Histoire de la république de Venise*〕の短い抜粋さえも残されている[42]。

1850 年代のロンドン亡命期になるとマルクスは歴史研究を再開した。1850 年から 53 年にかけて書かれた「ロンドン・ノート」は，確かにイギリスとフランスの経済学者の著作からの抜粋が大きな分量を占めているが，マルクスは貨幣史の議論にも熱中した。これにかんする古典的著作や最新文献をいくつか学んだのであり，とりわけ 1819 年刊行のジェルマン・ガルニエ

---

[40] 次を参照。*MEGA*^{2} IV/6, S. 3–973. 管見のかぎり，ギューリヒ抜粋は，マルクスによるものと伝えられた政治経済学抜粋のなかで最長のものだ。彼は後になっても，この抜粋を繰り返し使用したらしい（これについては以下を参照。Heinzpeter Thümmler, “Gustav von Gülich und die Erarbeitung der Gülich-Exzerpte durch Karl Marx”, in: *Marx-Engels-Jahrbuch*, 7, Berlin, 1984, S. 201–225）。

[41] この研究は，計画されたものの執筆されなかった「政治学批判」に示されている。1844 年以降に作成されたあるノートに，あまねく知られた「フォイエルバッハ・テーゼ」が書きつけられているが，このまさに同じノートに，「政治学批判」についてマルクスの念頭に浮かんでいたものが，11 章ないしは 11 篇に区分された一片の略述に表わされている。ここに示されている主題は，「古代国家」と明確に区別される「近代国家」であり，したがってブルジョア社会の国家である。この近代国家は，フランス革命以前から革命期にわたるその「起源史」から，ブルジョア社会とともに「止揚」されるに至るまで，ブルジョア社会に対立し，またこの社会の上に立つものとなる。マルクスの重点は，近代国家の諸制度，その憲法体制，「代議制国家」の形成も含むその諸形態にある（vgl. Karl Marx, “Notizbuch aus den Jahren 1844–1847”, in: *MEGA*^{2} IV/3, S. 11）。

[42] いわゆるクロイツナハ・ノートは *MEGA*^{2} 第Ⅳ部第 2 巻として刊行されている。マルクスはヘーレンとウケールトの編纂した著作集を気にいっていたにちがいない。というのもマルクスと彼らはその研究関心の点で広く合致していたからだ。この著作集の編者序文には次のようにある。

> 一部党派や一身分に偏愛することなく，原典そのものから統治者と被統治者の歴史が描かれるべきである。こうして，どのように体制が発展したのか，第三身分がどのように形成されたのか，行財政組織にかんして，国民経済にかんして〈……〉何が起こったのかが判明する。〈……〉これによって時間を経るなかで各国がどのように今あるものとなったのかが理解される〈……〉。（“Vorwort der Herausgeber”, in: Johann Christian Pfister, *Geschichte der Teutschen: Nach den Quellen*, Bd. 1, Hamburg, 1829, S. IV.）

〔Germain Garniers〕の『貨幣史』〔*Histoire de la monnaie*〕，その当時の基本文献であるウィリアム・ジェイコブ〔William Jacob〕の貴金属史にかんする 1831 年の文献，さらにはこの同じ著者による農業史である。古典文献学者アウグスト・ベック〔August Böckh〕が 1817 年に刊行した『アテネの国家財政』〔*Die Staatshaushaltung der Athener*〕全 4 巻，また当時一流のドイツ経済史研究者であったヨハン・ゲオルク・ビュッシ〔Johann Georg Büsch〕の 2 冊の大著 —— その貨幣・金融史と商業史 —— もマルクスは集中的に研究した。これに加えて彼は，イングランド人によって書かれたイングランド銀行制度とイングランド国債とにかんする歴史書も一通り研究した[43]。さらにマルクスはヘーレンの別著も読んで抜粋した。ゲッティンゲンで 1819 年に印刷されたその『ヨーロッパ国家制度と植民地の歴史便覧』〔*Handbuch der Geschichte des Europäischen Staatenssytems und seiner Colonien*〕第 3 刷を読み，またヘーレンの『古代民族の交通・商業・政治の理念』〔*Ideen über die Politik, den Verkehr und den Handel der alten Völker*〕からはアジア諸民族にかんするその第 1 巻のみを抜粋した[44]。同時にマルクスは，植民地史にかんする一連の英文著作を研究した。1851 年になると彼は，ボン大学の歴史学者カール・ディートリヒ・ヒュルマン〔Karl Dietrich Hüllmann〕の存在に気づき，その『中世都市制度』〔*Städtewesen des Mittelalters*〕（全 4 巻，1826–29 年刊），『ドイツ身分制度起源史』〔*Geschichte des Ursprungs der Stände in Deutschland*〕（全 3 巻，1806–08 年刊），『ドイツ王侯位起源史』〔*Geschichte des Ursprungs der deutschen Fürstenwürde*〕（1842 年刊），『中世ドイツ金融史』〔*Deutsche Finanzgeschichte des Mittelalters*〕（1805 年刊）を読破し，その抜粋をとっている[45]。

1852 年には歴史全般について，さらなる抜粋が続く。ヴィルヘルム・ヴァクスムートが 1850–52 年に刊行した『一般的文化史』〔*Allgemeiner Culturgeschichte*〕，同著者による 1831–39 年刊行の『ヨーロッパ風習史』〔*Europäischer Sittengeschichte*〕が抜き書きされるとともに，グスタフ・クレム〔Gustav Klemm〕の『人類の一般的文化史』〔*Allgemeiner Kulturgeschichte der Menschheit*〕からの短い抜粋があり，またヘーレンの『古代人民の政治と商業について』〔*Dela politique et du commerce des peuples de l'antiquité*〕（当初 1793–96 年に発刊されたヘーレンの『古代民族の交通・商業・政治の理念』のフランス語版）第 3 巻からも再度短い抜粋が行なわれている[46]。翌年になるとマルクスはインド史を研究し，ロバート・パットン〔Robert Patton〕によって 1801 年に刊行された『アジア的王朝原理』〔*The principles of Asiatic Monarchies*〕を読んで抜粋し，もう一度ヴァクスムートの『ヨーロッパ風習史』にも取り組んでいる[47]。スペインの現状にかんする連続論説を書くために，スペイン史も広範に研究している[48]。

1853 年 9 月から 1854 年 7 月にかけては 4 冊の抜粋ノートが書かれた。そこでマルクスは外交

43　すべての抜粋が *MEGA*^{2} 第Ⅳ部第 7 巻で公表されている。

44　次を参照。*MEGA*^{2} Ⅳ/9, S. 502–515, 365–371 und 454–460. マルクスのヘーレンへの関心を理解するのは容易だ。というのも，このゲッティンゲン大学教授は政治史を，経済史，金融史，技術史と体系的に結びつけた最初の一人であったからだ。ヘーレンは経済的，唯物論的歴史把握の善良なブルジョア的先駆者と呼ばれてもかまわないであろう。

45　Vgl. IISG, MEN, Sign. B 60.

46　Vgl. IISG, MEN, Sign. B 62 und 63.

47　Vgl. IISG, MEN, Sign. B 63–66. 同時にマルクスはロシア史，スラヴ諸国史，ギリシア史，とりわけギリシア正教会の歴史とそれに続くロシア正教会の歴史を研究し，そしてポーランド＝リトアニア史にも取り組んでいる（vgl. ebenda, B 67 und 68）。

48　これらの抜粋は *MEGA*^{2} 第Ⅳ部第 12 巻で刊行された。

関係，つまり対外政策ないしはヨーロッパ国家間関係の詳細に取り組む[49]。再びマルクスは，1 冊の基本文献に取りかかる。ゲオルク・フリードリヒ・フォン・マルテンス〔Georg Friedrich von Martens〕が 1807 年に刊行した『15 世紀末からアミアンの和約に至るヨーロッパ国家通商と講和条約締結についての外交史綱要』〔*Grundriss einer diplomatischen Geschichte der europäischen Staatshändel und Friedensschlüsse seit dem Ende des 15. Jahrhunderts bis zum Frieden von Amiens*，以下『外交史綱要』〕である。マルテンスはゲッティンゲン大学自然法・国際法教授として近代的国際「実定」法学を基礎づけた人物であり，その主著『同盟，講和，休戦，中立についての条約原理集成』〔*Recueil des principaux traités d'Alliances, de Paix, de Trêve, de Neutralité*〕は 1791 年に出版されて以降，たびたび増補された。マルクスはこちらも知っており読みはしたものの，作成された抜粋は短いものでしかない。マルテンスの『外交史綱要』からの長大な抜粋で問題とされるのは，1477 年から 18 世紀中葉までのヨーロッパ各国の戦争・紛争史である。とりわけマルクスが徹底的に取り組んだのは，広範な国々にわたる講和条約の詳細な抜粋である。1648 年のウェストファーレン講和条約，1697 年のレイスウェイク講和条約，1713 年のユトレヒト講和条約，1738 年のウィーン講和条約，最後にオーストリア王位継承戦争を終わらせた 1748 年のアーヘン講和条約である。マルクスは繰り返し，「ヨーロッパ情勢」── 特定の時点（15 世紀の終わりから 1600 年，1660 年，1700 年，1740 年）におけるヨーロッパ国家間体制 ── についての簡潔な要約的考察を差し込んでいる。彼にとって明らかに関心があったのはヨーロッパの主要な政治的展開である。マルクスは，そこに関わるものとして，個々の国家やその変転する同盟関係ばかりか，ロシアとオスマン帝国をも当然数え入れる[50]。

マルクスによって 1854 年から数年間，使われた 1 冊の覚書・抜粋ノートには，初めてシュロッサー抜粋に似た形式のものが見られる。1853 年から 64 年にかけて出版されたグスタフ・シュトルーヴェ〔Gustav Struve〕の『世界史』〔*Weltgeschichte*〕全 9 巻からの抜粋が年代順に配列されたのである。だが，この抜粋はマルクスの手書きで 6 ページ程度しかない短いものであり，内容も非常に乏しく，時期も 1133 年から 1806 年に限られる。主要な政治的出来事については，ほんのわずかな点しか記されていない[51]。

1856 年にマルクスは初めてフリードリヒ・クリストフ・シュロッサーの著作を読んで抜粋した。それは，1843 年から 52 年にかけて全 8 巻で出版された英訳版『18，19 世紀の歴史』である。抜粋自体はやや短めで，手書きで 10 頁しかない。シュロッサーが描いた時代の主な出来事のうち，ほんのわずかなものが短いメモ書きで記録されているにすぎない[52]。同じ抜粋ノートには，イングランド史，ロシア史，北ヨーロッパ諸国・諸民族史についてのさらなる覚書と抜粋が書かれている。こうした研究をマルクスは継続した。ロシア史，スウェーデン史，イギリス史，フランス史，さらにもう一度イングランド史，オーストリア＝ハンガリー史，ドナウ川流域諸国史と，

---

[49] これらの抜粋も *MEGA*^{2} 第Ⅳ部第 12 巻で刊行された。

[50] Vgl. *MEGA*^{2} IV/12, S. 65–87 und 260–300. また次も参照。Volker Külow, "Marx' Exzerpte aus Georg Friedrich von Martens' *Grundriss einer diplomatischen Geschichte*: Anmerkungen zum Platz der Göttinger Historikerschule im historiographischen Schaffen von Karl Marx", in: *Marx-Engels-Forschungsberichte*, Nr. 6, Leipzig, 1990, S. 132–146.

[51] Vgl. IISG, MEN, Sign. B 76a. これに並行してマルクスは，北ヨーロッパ諸国史，スラヴ諸民族史，イングランド史をさらに研究している。

[52] Vgl. IISG, MEN, Sign. B 78.

その抜粋は広範囲にわたる[53]。1857 年のノートにも，シュロッサーにかかわる別の短い覚書がある。マルクスはナポレオンの歴史的役割にかんするシュロッサーの判断を書き留めている。同じノートにはヨハン・ゲオルク・アウグスト・ヴィルト〔Johann Georg August Wirth〕の『ドイツ史』〔*Geschichte der Deutschen*〕（1842–45 年刊，全 4 巻）も抜粋されている[54]。

1860–61 年にマルクスは，イングランド史，ポーランド史，ロシア史の研究を再開した。この同じ抜粋ノートに比較的長めの —— 少なくとも手書きで 20 頁分の —— 抜粋があり，そこには「ヨーロッパ各国史年代記」との表題が付されている。この簡潔な年代記は，1510 年から 1856 年までの出来事を包括しており，その典拠は 1809 年に〔初版が〕刊行されたヘーレンの『ヨーロッパ国家制度と植民地の歴史便覧』（1830 年刊第 5 刷）であるらしい[55]。

〔その後〕1868–69 年になってから，マルクスは歴史研究を再開する。これは『資本論』第 1 部刊行後，未完の経済学草稿の執筆作業を再開してからのことであった。特筆すべきは，彼が土地所有史に再び身を投じ，実際，この分野での新たな権威を見いだした点である。エンゲルスとともに彼は，ゲオルク・フォン・マウラー〔Georg Ludwig Konrad von Maurer〕の著作と邂逅する。ミュンヘン大学で教鞭をとった法律家，法制史家のゲオルク・ルートヴィヒ・コンラート・フォン・マウラーは，マルクスとエンゲルスにとってドイツ土地所有関係史研究の最も重要な情報源となる。マウラーが 1854 年に刊行した『マルク[iv]・農圃（ホ）・荘園（フ）・村落・都市制度および公権力の歴史序説』〔*Einleitung zur Geschichte der Mark-, Hof-, Dorf- und Stadt- Verfassung und der öffentlichen Gewalt*，以下『歴史序説』〕を，マルクスは 1868 年冬から 69 年に読みはじめ，その研究を 2 冊にわたるノートで続けた[56]。ハウスナー〔Otto Hausner〕によって 1865 年に刊行された『ヨーロッパ比較統計学』〔*Vergleichende Statistik von Europa*〕を，1869 年にマルクスが入手すると，その膨大な抜粋も行なわれた（小さな手書き文字で 60 頁以上となっている）。同時に彼はアイルランド史研究も継続した[57]。さらに続く年月において，特に 1875 年から 78 年に集中して，彼はさらなる研究拡大を企てる。マルクスは何冊ものノートを，ロシア史，とりわけロシア農業史についての抜粋で埋め尽くした。相前後してマルクスは，ボン大学歴史学教授カール・ディートリヒ・ヒュルマンの三つの大著 —— 1839 年に公刊された『ギリシア通商史』〔*Handelsgeschichte der Griechen*〕，1808 年の『ビザンツ商業史』〔*Geschichte des byzantinischen Handels*〕，1805 年の『中世ドイツ金融史』—— を研究した。ノートが一冊まるまる，これらの抜粋で占められている[58]。さらに 3 冊のノートにわたって，マウラーの諸著作 ——『歴史序説』，『ドイツ村落制度史』〔*Geschichte der Dorfverfassung in Deutschland*〕[v]，1856 年刊行の『ドイツにおけるマルク制度史』〔*Geschichte der Markenverfassung in Deutschland*〕，また 1862–63 年に

53　Vgl. IISG, MEN, Sign. B 80 und 82.

54　Vgl. IISG, MEN, Sign. B 89.

55　Vgl. IISG, MEN, Sign. B 96, S. 30–50.

iv　「マルク」とは古代ゲルマン社会に由来する共同所有地の呼称であり，ゲルマン人の定住団体によって所有された林野や牧草地，分担耕作地を指す。

56　Vgl. IISG, MEN, Sign. B 111 und 112.

57　Vgl. IISG, MEN, Sign. B 114, S. 55–112, und B 115.

58　Vgl. IISG, MEN, Sign. B 129.

v　本文中にあるマウラーの『歴史序説』と『ドイツ村落制度史』という 2 冊の書名は，原著ならびに英訳版には別の表題となっていたり欠落したりしているが，原著者の指示により日本語版で訂正・追記された。

刊行された『ドイツにおける賦役荘園(ホーフ)・農民圃(ホーフ)および荘園(ホーフ)制度の歴史』〔*Geschichte der Fronhöfe, der Bauerhöfe und der Hofverfassung in Deutschland*〕── から膨大な抜粋が書きつけられる[59]。これに続いてマルクスは，さらなる一著，スペインの法律家，著述家，保守派政治家であったフランシスコ・カルデナス・イ・エスペホ〔Francisco Cárdenas y Espejo〕の『スペイン土地所有史論』〔*Ensayo sobre la Historia de la Propriedad territorial en España*〕の研究にも打ち込んだ。この本は 1873 年と 75 年とに分かれて，２巻本としてマドリードで発刊された。カルデナス抜粋もまた，ドイツ語・英語・スペイン語混在で書かれた長いものとなり，そのノートは２冊半にも及んでいる[60]。マルクスのカルデナスへの関心は，何よりもまずスペイン封建制の説明にあった。スペイン封建制は，何百年にもわたる〔イスラム教系〕ムーア人支配との闘争において，つまりは暴力的な土地収奪の続発のなかで発展した。同じころ彼は，ロシア農地制度史やアングロサクソン法制史にかんする別の著作も研究し，ヒュルマンの『中世ドイツ金融史』にも２度ほど立ち返った[61]。1878 年になるとマルクスは，カルデナス抜粋を引き継ぐかたちで，イタリアの法学者（政治家）ステファノ・ヤチーニ〔Stefano Jacini〕の 1856 年の著書『ロンバルディアにおける土地所有制度と農民』〔*La Proprietà Fondiaria e le Popolazioni Agricoli in Lombardia*〕も読んで抜粋した[62]。

1879 年から 80 年にかけてマルクスは，古代ローマ史にかんする自分の認識を新たに深めようとした。このときには若干のドイツ人の著作がその研究対象となった。まずカール・ヴィルヘルム・ビュッヒャー〔Karl Wilhelm Bücher〕が 1874 年にフランクフルト・アム・マインで刊行した『紀元前 143-129 年の非自由民の反乱』〔*Die Aufstände der unfreien Arbeiter 143-129 v. Chr.*〕第 1 巻が分析される。次いでルートヴィヒ・フリードレンダー〔Ludwig Friedländer〕が 1862 年から 71 年にかけてライプツィヒで 3 巻本として刊行した『ローマ風習史論 ── アウグストゥスからアントニヌス治世末期まで』〔*Darstellungen aus der Sittengeschichte Roms in der Zeit von August bis zum Ausgang der Antonine*〕である。詳細かつ最長の覚書と抜粋がなされたのは，その第 1 巻が 1856 年にベルリンで公刊されたルートヴィヒ・ランゲ〔Ludwig Lange〕の『古代ローマ文化』〔*Römische Altertümer*〕であった。最後にマルクスは，ルドルフ・フォン・イェーリング〔Rudolf von Jhering〕によって 1852-54 年にライプツィヒで刊行された，その壮大な 2 巻本『さまざまな発展段階におけるローマ法の精神』〔*Geist des römischen Rechts auf den verschiedenen Stufen seiner Entwicklung*〕を読んで抜粋した。これらのローマ史についての抜粋と覚書はまさに膨大である（その 46 頁分は細かい字でびっちりと書き込まれている）。これが書かれているその同じノートには，インド史，アルジェリア史，中央・南アメリカ史にかんする広範な記録も含まれている[63]。マルクスが読んだこれらの著者は，当時にあっては広く知られた重要な古代史研究者ないしは法学者であった。なかでもイェーリングは，歴史法学派の著名な主唱者で法社会学の先駆者でもあった。概念法学から権利の歴史＝社会学的考察へのイェーリングの法理論的転回は，マルクスの未完の抜粋作業のなかに示されている。

59　Vgl. IISG, MEN, Sign. B 133-135.

60　Vgl. IISG, MEN, Sign. B 135, 136 und 137.

61　Vgl. IISG, MEN, Sign. B 146 und 148.

62　Vgl. IISG, MEN, Sign. B 153.

63　Vgl. IISG, MEN, Sign. B 156. このノートには，ローマ史関連の四つの抜粋に加えて，インドネシア史についての詳細な抜粋も含まれている。

ランゲ『古代ローマ文化』とフリードレンダー『ローマ風習史論』の抜粋でマルクスが着目したのは家族集団の変遷であり，婚姻法，家族法，そして広義の所有法の変遷であった。この所有法では，個人間，家族間，氏族（大家族）間，部族間の諸関係が一定の役割を果たしている。長いくだりのなかでマルクスはローマ的家父長権についてのランゲの叙述を要約する。この家父長権は，家族構成員，婚姻女性，子供，孫，自由労働者，奴隷，農奴，家畜保有，家屋，そして土地 —— つまりは都市と農村における古代ローマ的家内経済の中核的諸要素 —— に及ぶ。古代ローマ所有法の展開は，こうした都市や農村における家内経済の規模の変化や構成変化と直接かつ密接に関連する。この両者が，古代社会の社会構造の変容を明らかにし，古代的経済様式の根本的，基本的変化を指し示すのである[64]。

〔5〕どのようにマルクスは世界史を学んだのか？

これから〔本稿で〕取り上げる世界史の経過にかんする抜粋と覚書が書かれた時期は，マルクスが『資本論』第 2 部・第 3 部草稿に断続的に取り組んだ時期にもあたる。1881 年夏に彼は，第 2 部として構想していた最後の草稿を突然中断し，1882 年夏に，第 3 部として予定されていた最終草稿の執筆を止めた。こうして〔1883 年にマルクスが死ぬと〕両草稿とも未完のままとなったのである。この期間，資本主義の経済史に取り組んだと期待されよう。だが，実際にはそうではなく，マルクスは世界史の広範な研究に駆り立てられた。これはなぜなのか？　抜粋と覚書が厳密に検討される場合にのみ，老マルクスのこの逸脱と没頭の意味は理解されうる[65]。

〔晩年のボッタ＝シュロッサー抜粋ノートで〕問題になるのは，独創的研究でも，素材の収集でもない。というのも，マルクスが読んでいるものの大半は，彼にとって既知の事柄であったからだ。実際，彼がヨーロッパ内外の歴史に取り組んだのは，1881–82 年が初めてというわけではない。これは特に，シュロッサーの『世界史』における事実誤認を，マルクスが適宜訂正していることに表われている[66]。したがって当該ノートでの課題は，むしろ自己理解の刷新の試みにある。つまり，この準備作業によって，『経済学批判』序言で 1859 年に公表された「導きの糸」は，新たに定式化され，さらに敷衍されて一般化されたり，または細かく規定されたり，あるいはその両方の事態に至るかもしれなかった。

この抜粋でマルクスは，ボッタやシュロッサーの叙述に全体としては従うものの，個々の詳細については決して従っていない。マルクスはその泰斗たちを適宜訂正し，事実を正しく対置する。言い換えれば，ボッタやシュロッサーによって看過されたり，誤って整理・区分されたりした事態が，マルクスによって指摘される。彼は，出来事や重要関係者やその行動を年代順に —— 時折

64　古代ローマ史についてのこれらの抜粋は，*MEGA*[2] 第Ⅳ部第 27 巻で初めて公開される予定である。

65　長期にわたる —— マルクスの場合，40 年間継続された —— 研究過程の回り道が再構築されるとしても，そこで意図されたと思われる意味を一定理解する以上のことにはならない。他人との書簡でのマルクスの自己言及や自己評価は，しばしば誤解を招くものとなっている。

66　それゆえアムステルダム国際社会史研究所の遺文目録編纂者は，この抜粋ノートの説明に，シュロッサーの『世界史』だけでなく「その他の文献」をもその典拠として付け足している〔https://search.iisg.amsterdam/Record/ARCH00860#A072e534c62，2022 年 10 月 20 日訳者閲覧〕。これは疑うべくもなく正しい。マルクスはこの時までに広範な歴史研究を行なっており，だからこそシュロッサーの情報を頻繁に訂正できたのだが，そのさい他の典拠は示されていない。

その前後に目を配るものの —— 描いていくが，これそのものが目的なのではない。個人，家族，氏族，王朝が重視されるのだが，それは個人的，集団的主体が存在しなければ歴史的行動も起こりえないからだ。さらには，ある人物は他よりも重視されるのであり，この種の「重要人物」を位置づけることにマルクスは決して躊躇していない。たとえ，その人物の伝説にたいして反駁しようとするのだとしても，この点でのためらいはなかったのである。マルクスは，その大部分が既知である素材を，要約，整理，配列，評価しなおし，そのさい部分的には，抜粋対象であったボッタとシュロッサーの文献に示される解釈に逆らっている。まれに論評が —— 時に数語程度，時に簡潔な一節で —— 記されるのだが，これによって彼の抜粋の位置づけも理解されうる。マルクスはマルクスでありつづける。彼は気晴らしに研究しているのではなく，特定の研究課題を追究している。

1881-82 年の抜粋も含めて，マルクスの歴史研究の射程には驚くべきものがある。それは，解明されたかぎりでの先史時代，有史時代初期から，古代ギリシア・ローマ，古代末期，中世ヨーロッパから近世（19 世紀後半）にまで及ぶ。ヨーロッパ中心主義的な語り口もない。ボッタとシュロッサーの主要典拠にはそのきらいがあるのだが，マルクスは世界史を，「ヨーロッパの世界史」とは見なさない。マルクスがその歴史を研究するのは，小アジア半島，中近東，イスラム世界，両アメリカ大陸，アジアの諸地域（インド，中国，中央アジアの三つに重点が置かれるそれ），そして北アフリカにわたっている。彼は，ヨーロッパ各地 —— 北ヨーロッパ（スカンジナヴィア半島），西ヨーロッパ（フランス，イングランド，ドイツ），南ヨーロッパ（ポルトガル，スペイン，イタリア，バルカン半島），東ヨーロッパ（ロシアにまでわたる地域）—— を深く学び，ヨーロッパ主要宗主国の植民地史，したがってまたヨーロッパによって植民地化された地域（北アメリカ，ラテンアメリカ，インドネシア，北アフリカ）の歴史をも研究している。

特徴的なのは，政治的行動 —— 時に合法的な，そして軍事的なものにしばしば転化する国家の活動 —— が，技術的，経済的発展と結びつけられて把握される点だ。「唯物論的」な，あるいは現実的な歴史把握の著作家に当然期待されることだが，さまざまな資料に繰り返し取り組むことでマルクスが得ようとするのは，経済的「土台」にかんする事柄である。だが，とりわけ書きだされるのは，政治権力が —— 意識的，無意識的に —— 経済的「土台」に影響を与え，この「土台」を変容させ，それを再構成させる事態である。課税立法，財政運営，国家機構，領土上の公的行政区分，宗教組織，軍事編成ないしは軍制改革について彼は詳しく記しつづける。ノート本文に書きつけられたマルクスの論評は数少ないが，そこには，伝説的人物に仕立てあげられてきたマルティン・ルター〔Martin Luther〕やトマス・ミュンツァー〔Thomas Münzer〕などの個人の歴史的役割が言及される。マルクスはシュロッサーを，いわばその性分に逆らうかたちで読み込む。シュロッサーは，主要な国家行動だけに焦点をあて，また道徳的悪意をもって権力それ自体を常に「悪」と見なすのだが，こうした見方にたいしてマルクスは対抗する。広く知られたことだが，シュロッサーは独自の「啓蒙主義的歴史観」を推し進めており，その歴史把握は，人物・行動・出来事にたいして「哲学的」に思考することで，高度に主観的な道徳的判断を下すものであった。シュロッサーの資料の扱い方は素朴で無批判的であった。そして彼は自分の道徳的判断に依拠して，「物事の自然的，必然的進行」を信じ込み，つまりはあらゆる所に「進歩」を見いだしたのである。シュロッサーは「個人の確かな知識」を大いに誇ったが，その記述は信の置けるものではないとマルクスは熟知していた[67]。

〔6〕抜粋ノート全4冊には何が示されているのか？

〔── 6－1　『年代記抜粋　Ⅰ』〕

第1ノート[68]の抜粋をマルクスは，ボッタが論じる紀元前97年からのローマ史から始める。こうして彼は，1879-80年の自分の古代ローマ史研究と直接結びつけるのだが，このノートで継続されるさいの焦点は別のところにある。すなわち帝政ローマ時代 ── そして後に古代末期に向かうローマの発展 ── に彼が関心を寄せる理由は，その政治経済と国家組織とにある。マルクスが強調するのは，当時のローマ帝国圏 ── とりわけその中核領域である地中海圏 ── が商業関係によって統合されていたことである。ローマの交易はインドにまで及び，その交易経路はエジプトやシリアを横断する（その中継点がパルミラである）と，彼は記している。古代末期における政治的な ── すなわち行政官僚的かつ常にまた軍事的なものでもあった ── 組織再編，東西二国家への帝国領域の分割，それぞれで異なりつつもその大部分が似かよった両国家の発展 ── たとえば文民権力と軍事権力との漸進的分離（帝政ローマ時代にはなかった事態）──，教会組織の自立化など，その詳細がボッタの叙述から書き写される。マルクスは，文民行政組織ならびに軍事組織の構築を細かくたどっている。

特にマルクスの関心を呼び起こすのは租税制度の詳細であり，古代末期の数多くの税制改革であった。ジャン・ボダン〔Jean Bodin〕の『国家論6編』〔*Six livres de la république*, 1576年刊〕では「財政こそが国家の神経」と言われるが，マルクスもこの点をきわめてよく理解していた[69]。租税をかける富が見いだされる場を行政組織が認識する場合にのみ，強力な政府と課税措置とは可能になる。古代末期ローマでは包括的な租税土地台帳が初めて作成されるが，その目的は地租を毎年改めるためであった。このために必要となるのが，あらゆる地所とその所有者ないしは所持者を記録した正確な土地記録簿であり，その収穫高にもとづく全土地資産の公定評価である。古代ローマの行政組織は，租税記録簿の15年毎の更新を早くも試みる（つまり土地台帳とその資産評価は，当該期間に起きた変化に適合させられる）。

---

[67] 規範的，主観的評価を下す代表的歴史叙述家であるにもかかわらず，シュロッサーは時に革新的方法を駆使した事実蒐集家でもあった。彼は，その『18世紀から19世紀での瓦解に至るまでのフランス帝国史』〔*Geschichte des 18. Jahrhunderts und des 19. bis zum Sturz des französischen Kaiserreichs*〕（ハイデルベルク，1823年刊）において，まだパリで存命中の目撃者にインタビューを行ない，その陳述を自分の説明に応用した最初の一人である。これは当時の歴史家としては，かつてない手法であった。ドイツ歴史科学の発展 ── つまりレオポルド・フォン・ランケ〔Leopold von Ranke〕の影響下での「歴史主義」への転回 ── という文脈における歴史家シュロッサーの今日的評価については次を参照せよ。Ottokar Lorenz, *Der Historiker Friedrich Christoph Schlosser und die Geschichtsschreibung*, Berlin, 1868; Ders., “Die philosophische Geschichtsschreibung (Friedrich Christoph Schlosser)”, in: Ders., *Die Geschichtswissenschaft in Hauptrichtungen und Aufgaben*, Band 1, Berlin, 1886, S. 1-89.

[68] 次を参照。IISG, MEN, Sign. B 108/B 157.

[69] さまざまな著作でマルクスは言葉を変えて，この同じ基本思想を繰り返している。「国家の経済的定在は，租税である」（“Die moralisierende Kritik und die kritisierende Moral”, in: *MEW* 4, S. 348〔マルクス「道徳的批判と批判的道徳」『全集』④，365頁〕）。「租税は〈……〉執行権力の全機構にとって，生命の泉である」（*Der achtzehnte Brumaire des Louis Bonaparte*, in: *MEW* 8, S. 202〔マルクス「ルイ・ボナパルトのブリュメール18日」『全集』⑧，198頁〕；*MEGA*^{2} I/11, S. 183）。「租税は政府機関の経済的基礎であって，それ以外の何ものでもない」（“Randglossen zum Programm der deutschen Arbeiterpartei”, in: *MEW* 19, S. 30〔マルクス「ゴータ綱領批判」『全集』⑲，30頁〕；*MEGA*^{2} I/25, S. 23）。

古代ローマの没落は，巨大な歴史的退歩，大文明の瓦解の，古今にわたる典型的実例である。マルクスがその記録によってたどるのは，ゲルマン系諸部族の相次ぐ民族移動の圧迫のもとで西ローマ帝国が崩壊し，相互に敵対しあう一連の諸王国〔Königreich〕へと解体していくその歴史だ。ビザンツ帝国，すなわち東ローマ帝国はまったく異なるかたちで発展し，西ローマ帝国領の再獲得を，つまりは「蛮族」の圧迫の阻止を長期にわたって試みる。西ローマ帝国の国家権力が瓦解したことで，イタリア半島ではローマ教皇〔Papst〕が政治権力として台頭する。イタリアはランゴバルド族の支配圏とビザンツ帝国の統治領域とに分割されるのだが，マルクスの言葉では，これらの両権力を教皇は「巧みに渡り歩く」からだ。当初はビザンツが教皇の庇護者であったが，その勢力が弱まるにつれて，教皇は域外勢力（つまり非イタリア的勢力）の庇護を求める。「これが教皇の伝統的方策となる」，「マキャヴェリ〔Macchiavelli〕を見よ」とマルクスは補足する[70.vi]。教皇は次第に世俗諸侯〔Fürst〕のようにふるまいはじめ，したがって他の世俗諸侯との闘争に至る。

次にマルクスが追究するのは，フランク王国の台頭である。その抜粋では，カール大帝〔Karl der Große〕の時代に大きな紙幅が割り当てられる。マルクスの関心は，カール大帝の人物像やその行ないにはあまりなく，むしろこの時代に成立する封建制度の諸要素の探索にある。この要素はまずはランゴバルド族統治下のイタリアに由来する。ランゴバルド族は，副王〔Unterkönig〕とされた〔ゲルマン系の〕公〔Herzog, 軍事指導者〕のもとに土地を分割することで，「初期封建制〔haut système féodal〕」の基礎を築く。カール大帝は，そこに全面的な行政・軍事組織を取り入れることで，この制度を拡充する。彼は厳格に土地を細分する。つまり，新たな位階，官職・職務，伯〔Graf〕，辺境伯〔Markgraf〕などを創設して，これらの新しい従属的役職者たちに土地を分配する。当初は軍事管理組織だけが問題とされ，文民行政組織や司法組織に手はつけられなかった。だが封建的軍事指導者は，永続的戦争状態のために文民的職権を乗っ取っていき，自由公民〔Gemeinfreier〕や初歩的な地方自治と対立する。カール大帝は，新興の封建的支配者を介して「自治集会〔Munizipalrat〕」の弾圧を促す。「奴隷制〔esclavage〕と農奴制〔servage〕が並存する」とマルクスは評する。

マルクスは，回顧と予見を繰り返すなかで，ボッタの説明する年代を超え，さまざまな国や地域に目を向け，その相互に連関しあう発展過程を追究するのだが，そうすることで彼は初期中世ヨーロッパの発展を描きだす。シチリア島の事例でマルクスが記すのは，次々と入れ替わる支配層がこの島の経済と社会構造とにもたらした特色である。旧支配層であったビザンツ勢力をシチリア島から駆逐したアラブ人は，行政組織全体と法体系とを再編したが，マルクスはこのアラブ人支配を詳細に述べている。アラブ人が導入した所有法・相続法体系は，マルクスの判断では，きわめて適切であり，その次の征服者であったノルマン人がこれについては何も手をつける必要がなかったほどであった。アラブ人がシチリアに取り入れた租税体系と，そこでの農商業の発展についてマルクスは書いている。アラブ人は主要作物としてオリーヴ栽培を奨励し（オリーヴ自体は古代ローマ時代以前から地中海交易での重要商品であったが，古代ローマ時代のシチリアは帝国の穀倉地帯であった），農業生産での奴隷労働を廃止し，自由な労働者に奴隷を置き換えた

70　IISG, MEN, Sign. B 108/B 157, S. 13.

vi　以下，1881–82 年の抜粋ノートのページ数が原注 70，71，73，74，77，80，81，83 と示されるが，原著ならびに英訳版では誤記があったとして，原著者の指示により日本語版で訂正された。

(ただし奴隷制そのものは廃止されなかった)。

ボッタの叙述ではビザンツ帝国は外的勢力の役割しか果たしていない。だが，マルクスはビザンツの歴史から，ビザンツに影響された東ヨーロッパの歴史にも立ち入る。マルクスはビザンツ帝国とキエフ・ロシアとの通商関係を述べ，こうしてルーシ（北ヨーロッパのヴァリャーグ人）の歴史に触れる。ビザンツにたいするブルガリア，ロシア，ハンガリーなどの長期にわたる戦争の結果，東ヨーロッパならびにロシアはキリスト教化され，つまりは東ローマ的ギリシア正教会の影響が東ヨーロッパの広域に広まる（そして，その影響は残りつづける)。

カール大帝の死後，フランク王国が解体することによって，ドイツとフランスでの封建制度の歴史的発展が比較可能になる。この双方が，それぞれ別の方向に向かって変化するからだ。ドイツ帝国史で中心的役割を果たすイタリアからもマルクスは目を逸らすことがない。フランスでは，王にたいする大封建領主層の自立化がドイツよりも容易に進展したとマルクスは要約する。しかしドイツでもまた，カロリング朝断絶後，王の権威が解体される。というのも数人の公が自分の支配領を，自らの血統にもとづく世襲領地に転化させ，また小規模な伯領がいくつも自立するからである。それにもかかわらず中央権力は，王の全権代理人（王室巡察使〔Kammerbote〕）によって封建領主層を自らの支配下にとどめようとする。いくたびかのハンガリー人の来襲は王の権威を助け，その新たな興隆をもたらす。重装騎兵団が恒常的に動員できなければ，そして堅牢な城郭都市に多額の費用をかけて城壁をめぐらさなければ，東方からの騎馬民族の略奪を阻止できないからだ。

マルクスはイタリア（そしてドイツ）を考察するなかで，司教や大司教が独立して大封建領主に転化する事態を記す。この「小王」たちはドイツ皇帝やイタリア王に形式的にしか従属しない。〔こうして〕司教は都市を統治するが，イタリアの都市のなかでは封建支配体制との闘争が始まる。他方，農村部では，あらゆる地方権力，地域権力，領土的権力が分立し，独立を求めて抗争しあう。さまざまな小国家が次々と出現し，忠勤の誓い〔vassalage〕という封建的紐帯の弱体化，場合によってはその解体さえもが，いたる所で優勢となり，この事態はまた，大封建領主や外的勢力との絶えざる闘争によって助長される。これらのあいだで締結される同盟関係は目まぐるしく変わりうる。

マルクスの関心をまさに引きつけるのはイタリア商業都市の興隆である。ヴェネツィア，アマルフィ，ジェノヴァ，ピサの富は貿易からもたらされるのであり，つまり世界商業への関与のおかげだ。これらの都市は名目上，ドイツ辺境伯（トスカーナやリグーリア）やイタリア王に従属してはいるものの，「自らの名のもとにシチリア島，コルシカ島，サルデーニャ島，そして遠隔地へと大規模出兵を行なうこと」もためらいはしない。これらの都市は小さな主権者のようにふるまい，「軍事条約や講和条約」（通商条約）「を独断で締結する」。それは「独立した自治都市（コムーネ），イタリアの自由の在り処」であったとマルクスは書く。これらの都市共和国は次第に独立を勝ちとる。「ヴェネツィアは，その当初から独立した大都市であった。アマルフィ，そしてとくにピサやジェノヴァは封建的な枷を次第に解消して独立した。これらは共和国と呼ばれる」が「実際にそうであった」。海上交易港湾都市としての「これらの小共和国」の事例は，イタリア「内陸部の状況に対応するものであった」[71]。初期商人資本主義の政治的主権を備えた島々が，依然として封建的な農業経済の大海のなかに浮かぶのだが，この意義をマルクスは明瞭に理解する。こ

[71] Ebenda, S. 31.

れらの島々は，恒常的な海上通商派遣によって広大な地理的商業ネットワークをつくりだす。アマルフィ，ジェノヴァ，ヴェネツィア，ピサといった都市共和国は，海上商業と船舶交通の中心地や中継点というその立地とその特異な経済活動のおかげで豊かになり，その独立を自ら買い取ることができるようになる。これにロンバルディアやウンブリアやトスカーナなどの内陸部の諸都市が続く。これらの都市は，陸上における遠隔地商業を発展させ，世界交易のための高度に専門的な生産を発達させ，商業信用と商業貨幣（為替手形）の初期形態を発達させる（海上交易都市もだいたい同じ頃に同様のものを発達させる）。これらの敵対的な資本主義的共和国は同盟関係を変えながら熾烈な闘争を展開しあい，時に地域諸侯と同盟したり対立したり，あるいはまた皇帝支配や教皇支配に対抗するために地域諸侯と同盟したり，あるいは諸侯に対抗するために皇帝や教皇と同盟したりする。だが，これについてマルクスはこのノートの余白でしか触れていない。これらの闘争のなかで都市共和国は近世初期の領土国家に転化し，たいてい，重要な通商路や天然資源を掌握しようとする。また「都市同盟」や「ハンザ同盟」を結成した複数の都市共和国は，当時の大封建領主勢力と対決し，ついにはドイツ皇帝への反抗さえも決行している。ところがマルクスは，こうした都市共和国間の ——〔主に〕一時的なものだが，長期にわたることもある —— 同盟関係の役割についても，これまたほとんど言及していないのである[72]。

都市共和国は銀行・金融業者として急速に台頭するがゆえに，諸侯に対して，そして封建的位階制全体に対して，前近代的資本を体現するものとなる。しかし，ここでマルクスは年代順に従って，封建制の発展へと（ボッタとともに）向かってゆく。彼は，イタリア支配をめぐる封建的（宗教的，世俗的）諸勢力間の闘争を検討する。この闘争において都市は一定の役割を担うのだが，それは，司教や王や諸公の同盟者としてであって，封建的秩序全体に対抗する自立的勢力としては描かれていない。政治権力は分裂したままであり，形式的位階制はあるものの，そこには確たる形態がいまだに存在しなかった。それゆえマルクスが言及して強調するのは，成文法を備えた封建的秩序への漸次的移行である。この移行は 1037 年の皇帝コンラート 2 世〔Konrad II〕の法令 —— 封土法〔Constitutio de feudis〕(「イタリア王国の聖職禄にかんする勅令〔Edictum de beneficiis regni Italici〕」という名でも知られる)[vii] —— とともに始まる。それは「最古のものとして知られる〈……〉（封建的世襲についての）封建法」だ。この勅令は，まずは下級封臣による封建的所有地の世襲を定め，世俗的，宗教的大領主層の下にある封建家臣〔Vasall〕にたいして，その所持地の世襲的占有を保証した。これが「後年発展させられる成文封建法の基礎」となった。マルクスがシュロッサーを参照するかたちで補足する点だが，コンラート 2 世は同時に，永遠の私闘を禁ずるために神の平和〔Gottesfriede〕を告知した。「神の休戦〔Treuga Dei〕，水曜日夕方から月曜日明け方までの停戦」が，教会による過酷な刑罰という脅しのもとに現われた[73]。中世封建社会の文明化〔Zivilisierung〕に向けた一歩である。

---

[72] 第 2 ノート（IISG, MEN, Sign. B 109/B 158）になって初めて，ロンバルディア都市同盟が，イタリアの支配権をめぐって，その地を何世紀も荒廃させた闘争の中心的政治主体の一つとしてきちんと認識されることになる。

[vii] 原著では本文に「コンラート」とあったのを，原著者指示により「コンラート 2 世」に修正した。また「封土法」から「でも知られる)」の箇所は日本語版で追記された。

[73] IISG, MEN, Sign. B 108/B 157, S. 33. なおマルクスはそのノートにおいて，この勅令を正式名称では記していない。しかしながら彼の説明で述べられているのは，この勅令の内容である。〔この原注の「なおマルクスは」から始まる最後の 2 文は日本語版で追記された。〕

マルクスは支配者の移り変わりとか，戦争や戦闘の帰趨とかには関心がない。彼が焦点にしたのは政治形態の変化であり，これに関わる巨大な革新が書き留められた。たとえばノルマン人は，シチリア島とナポリ王国での封建支配という文脈において議会を開設する最初の人々である。これはまたノルマンディーでも導入される。この議会は二院制あるいは二集会制からなる貴族議会であり，全般的事項の協議のために年に2回開かれ，「封候部会〔bras baronial〕（議会〔chambre〕）」と「聖職者部会〔bras ecclésiastique〕」とに分かれていた。後の時代になると，豊かになった都市が，金銭を払うことで封候〔Barone〕支配から解放され，自由となる。それにつれて第三院が出現する。これが「自由を買いとった都市代表部会（議会）であり，所有者部会〔bras domanial〕と呼ばれた」[74]。シチリアでは議会が維持され，頻繁に招集されると，マルクスは記している。

この第1抜粋ノートは十字軍遠征で締めくくられる。マルクスはこの遠征を事細かに追究する。しかし，それを始める前に彼が詳細に取り組んだのは，中近東，北アフリカ，小アジア半島，そしてペルシアとインドにまで及ぶイスラム教徒の征服運動の結果として生じた政治的支配の発展の方だ（ボッタの本を超える内容だが，マルクスは自分の典拠を示していない）。マルクスはバクダッド，モスルなどのカリフ統治領について述べる。それはビザンツとの恒常的戦闘状態のなかから現われる特殊な帝国形態である。カリフ統治領は支配者によって，いくつもの封土支配権に分割されて編成され，これによって新たな帝国は「無数の小国家」に解体する。こうして出現したのが，局地的小国が，いかなる上位支配者にも従属せずに競合しあうという構造である。そこに遠征十字軍が小アジア半島や近東地域で衝突する。マルクスは第1次十字軍の主要な出来事として，近東地域で最初に設立されたヨーロッパ型封建国家，エルサレム王国の建国について記している[75]。マルクスは，分裂しつつも十字軍として連携したヨーロッパ封建諸勢力の役割を把握しようとして，イングランドとフランスの両封建国家の政治的発展にも立ち入り，その回顧と展望を書き記すが，突如として十字軍の叙述に立ち返る。イタリアのさまざまな都市共和国は，十字軍の活動をつうじて豊かになり，強力なものとなる。というのも，これらの共和国は軍事的大遠征の兵站を支配したからである。それゆえマルクスは年代順の記述を中断し，ヴェネツィアの発展 —— その5世紀から十字軍時代までの政治的，経済的発展 —— の要約を挟み込む。

十字軍は敗北でもって終わるが，ヨーロッパ域内（南フランスやアイルランド，スペイン）では継続する。十字軍によって一時的に連合したイスラム教系小国家も侵攻を拡大させ，その戦争はビザンツ帝国へ，そして南東ヨーロッパにあるキリスト教系諸国へと及ぶ。東ヨーロッパ封建諸国家は，13世紀にはモンゴル人の来襲に抵抗する拡大十字軍を率いる。このことからマルク

74　Ebenda, S. 38.

75　マルクスの要約は，1895年3月12日のコンラート・シュミット〔Conrad Schmidt〕宛書簡におけるエンゲルスの説明を思いださせる。

> いったい封建制度はかつてその概念に一致していたことがあったでしょうか？　西フランク帝国で成立し，ノルマンディーでノルウェー人征服者によってさらに発展させられ，イギリスと南イタリアでフランスのノルマン人によって成長させられた封建制度が，その概念にいちばん近づいたのは —— 短命のエルサレム王国においてでしたが，この王国が遺したエルサレム法典〔Assises de Jérusalem〕は封建的秩序の最も古典的な表現でした。（*MEW* 39, S. 433〔「エンゲルスからコンラート・シュミットへ　1895年3月12日」『全集』㊴，377頁〕.）

スは，モンゴル帝国の出現と発展について詳細な覚書を書き記す。── ここでマルクスはヨーロッパを離れ，モンゴル人支配下の中央アジア，ペルシア，インド，そして中国を論じている。

〔── 6－2　『年代記抜粋　Ⅱ』〕

次の第 2 ノート[76]において，マルクスは十字軍時代の後のヨーロッパに立ち返る。とりわけドイツ，フランス，イギリス，イタリアである。彼は，フランスを荒廃させた百年戦争などの大きな紛争を詳細に追っている。というのもヨーロッパ政治を動かしているのは，依然として王朝間の戦争なのだが，この戦争のなかでヨーロッパの国々〔Nation, 国民〕が徐々に発展するからだ[viii]。最も多くの紙幅は，13 世紀終盤からのイタリア都市共和国の経済発展の記録で占められている。ここに近代資本主義の始まりをマルクスが見いだしているのは明らかだ。つまり農業が初めて系統的に発達し，農学が生みだされ，海洋法も始まり（カタルーニャ人とイタリア人が関与している），イタリアでは近代的銀行制度が起こり，銀行が創設された。疑うべくもないが，イタリア人こそが「ローマ教会に属する全キリスト教徒の公課と租税を徴収して，ローマへと送金した」のであり，イタリアの商業都市は「両替業と特に関わっていた」。マルクスは一連の都市（ローマ，ジェノヴァ，ヴェネツィア，ピアチェンツァ，ルッカ，ボローニャ，ピストイア，アスティ，アルバ，フィレンツェ，シエーナ，ミラノ）をすべて取り上げる。これらの諸都市はモンペリエで「合同中央銀行」を共同で経営し，これを介してフランス王国との信用取引を行なった。そのノートでマルクスが書き留めるイタリア商業都市の発展は，一定の都市間分業を生みだした。貨幣取扱業は，特に内陸部の重要都市で行なわれる一方，ジェノヴァやヴェネツィアといった港湾都市は「真の世界商業」を支配し，その商社支店を地中海全域，黒海，そして紅海にまで設けていた[77]。ジェノヴァとヴェネツィアはクリミア半島から中国との遠隔地交易を営んでいた。マルクスは，個々の都市共和国の政治的展開を詳細に記録する。とりわけフィレンツェ市内での展開は，貴族層の完全な権力剝奪でもって終わるのだが，この点がマルクスの関心を呼ぶ。フィレンツェの権力闘争を描くために彼は，ボッタにならって，マキャヴェリを主要典拠として用いる。ピサ，ピストイア，ミラノ，ヴェネツィア，ヴィチェンツァでも同様の闘争が起こり，そこでは繰り返し貴族層が介入する。

第 2 ノートには 14，15 世紀のドイツの発展に大きな紙幅が割り当てられる。マルクスは主要な出来事と主な人物を書き記しているが，そこには 13 世紀から 14 世紀にかけてのオーストリアの独特な発展も書かれており，またこれと繰り返し比較するかたちで，同時期つまり 1300 年から 1470 年までのフランスの特殊な発展にも注目する。第 1 ノート同様，マルクスは，政治的および法律的発展，戦争と出兵，行政組織についての記述を，経済的，技術的発展の説明と結びつける。第 1 ノートと同じように，さまざまな出来事のあいだの大筋を彼は特定しようとする。さらには，これもまた第 1 ノートと同じように，ドイツ，イタリア，フランス，イングランド，スペイン，そしてポルトガルの歴史的発展が相互に連関させられながら追究される。マルクスは，イベリア半島での国土回復運動（レコンキスタ）とムーア人王国瓦解の主要段階も，その発端から終結まで年代順にたどるのだが，このさい，その長期にわたる影響を問題にする。ポルトガルの独立は一つの重

76　次を参照。IISG, MEN, Sign. B 109/B 158.

viii　本文にある「次の第 2 ノート」から，ここまでの 4 文は，日本語版で文章が改められた。

77　IISG, MEN, Sign. B 108/B 157, S. 109.

大事件である。なぜなら，この国は海洋・商業大国として台頭するからだ。ポルトガルは，ヨーロッパの辺境に位置することから，その域外であるアフリカへと進出し，ヨーロッパの拡大の先駆となる。

第１ノートと同じようにマルクスは，ドイツとイタリアの封建的構造の展開をさらに検討する。とりわけ，ドイツ皇帝との闘争と相互衝突とを交互に繰り返してきたイタリアの諸都市が，ようやく同盟するまでの展開である。マルクスは，シュロッサーが提示した事実 —— ビザンツ帝国，躍進途上のオスマン帝国，あるいは近東・北アフリカにあったカリフ統治領での封土支配の発展 —— をとりまとめて整理する。チンギス・ハンによるモンゴル帝国の創設，戦争と征服によるその広大な領土拡大，一時的安定，そしてその崩壊という歴史から，マルクスは，広大な領土を有する政治権力の限界を考察する。モンゴル帝国が示すのは，海洋支配を欠いた純粋な陸上権力の限界である。ところで海洋支配こそが，西ヨーロッパ辺境で形成された小国家 —— ポルトガル，オランダ，イングランド —— によってまさに構築された類いの政治＝軍事権力のあり方なのである。これらの国家は，海洋支配にもとづく新興帝国の基盤として，この種の権力を活用する。オスマン帝国の発展と拡大，そして 1453 年のコンスタンティノープル占領によるビザンツ帝国の滅亡は，世界商業の大動脈を移動させる。それは地中海から大西洋へと移り，この変動は，イタリアのジェノヴァやヴェネツィアといった海洋商業共和国でまっさきに察知されることになる[78]。

イングランドとフランスは，この時期，ほぼ間断なく戦争状態に覆われている。大貴族一門が争いあう。イングランド王位をめぐるフランスの百年戦争であり，敵対的貴族党派間でのイングランドのばら戦争である。それはまた王が都市と同盟して諸侯に対峙した内戦であり，諸侯が都市と同盟して王に対峙した内戦である。このうちつづく戦争のなかで，さまざまな伯領や公国や王国がまるごと現われては消失する。フランスとドイツのあいだで独立国家ブルゴーニュが台頭して没落するが，この事実をマルクスは書き留めている。その教訓は明快だ。すなわち国家にも帝国にも，そこに属す自然的領土や国民・臣民など存在しないのであり，それらは没落しうるものなのである。土地と人口をめぐって，領土をめぐって，都市とその富とをめぐって，封建諸国家は闘争する。諸王，諸侯，教会諸侯，都市といった敵対的政治勢力は闘争し，あらゆる党派が次々と同盟関係を変えながら闘いぬく。

---

[78] 世界貿易の方向と重心の変化，ある地域から別の地域へのその中心地の移動は，マルクスとエンゲルスによって以前にも取り上げられた主題だ。これが示されたのは 1850 年，『新ライン新聞　—— 政治経済評論』〔*Neuen Rheinischen Zeitung. Politisch-ökonomische Revue*〕で公表された資本主義的世界経済情勢にかんする評論においてである。彼らの見方によれば，1848 年のカリフォルニアでの金鉱の発見は，世界貿易に 2 度目の「新たな方向性」をもたらした。その重心は大西洋から太平洋へと移るかもしれなかった。

> 世界貿易の大中心地〔Emporium〕は〈……〉中世ではジェノヴァとヴェネツィアであり，これまではロンドンとリヴァプールであったが，いまやニューヨークとサンフランシスコ，サン・フアン・デ・ニカラグアとレオン，チャグレスとパナマがそれになろうとしている。世界交通の重心は，中世ではイタリア，近世ではイギリスであったが，いまや北アメリカ半島〔つまり北アメリカ大陸〕の南半部がそれである。旧ヨーロッパの工業と商業は，もし 16 世紀以後のイタリアの工業と商業と同じような衰退に陥ることを欲しないのであれば，またイギリスとフランスが今日のヴェネツィア，ジェノヴァ，オランダと同じようになりたくないならば，非常な努力をつくさなければならない。数年のうちに〈……〉太平洋は，現在の大西洋，古代と中世の地中海と同じ役割 —— すなわち世界交通の大水路としての役割を果たすであろう。（Karl Marx/Friedrich Engels, “Revue［Januar/Februar 1850］”, in: *MEW* 7, S. 221〔マルクス，エンゲルス「評論［1850 年 1 – 2 月］」『全集』⑦，227 頁〕；*MEGA*^{2} I/10, S. 218/219.）

〔── 6－3　『年代記抜粋　Ⅲ』〕

第 3 ノート[79] の抜粋は，およそ 1470 年から 1580 年の時期に関わる。マルクスは，ヨーロッパの新興諸大国の長期の紛争，つまりフランスとスペインの敵対関係から書き始めている。この闘争はイタリア支配をめぐるものであったが，イタリア自体は教会，都市共和国，小規模な諸侯国に分割され，ドイツ皇帝が退去したのちは，もはや統合されていなかった。フランス王とスペイン王は互いに競いあうかたちで，イタリアの都市共和国にたいする征服戦争を遂行した。一方は北から，他方は南から進出し，教皇や都市（そして時にドイツ皇帝）の同盟と衝突した。これによって政治的景観も都市共和国の性格も一変する。都市共和国は大国からの独立を，すなわち都市の自由を守ろうとして，その同盟関係を変えながら，大国間の敵対関係を自分たちのために利用する。マルクスはそのノートのなかで，サヴォナローラ〔Savonarola〕の時代のフィレンツェの状況を描く。マルクスはサヴォナローラの人生 ── 彼が説教師として登場し，1494 年にメディチ家の追放によってフィレンツェの事実上の支配者として台頭し，ついに敗北して 1498 年に処刑されるまで ── を非常に詳しくまとめている。

サヴォナローラは，ドイツとフランスを襲った 16 世紀の宗教改革運動のまさに先駆者である。マルクスはこの運動を政治的，社会的，知的かつ道徳的な革命だと明確に見なす。それは反宗教改革運動，反革命をも引き起こす。これらの運動がすべて結びつきながら一つの政治的秩序へと移行するのだが，この秩序において新興市民層は，資本 ── 都市における商業・金融資本 ── という新たな経済力を駆使して，王や諸侯を打ち負かそうとする。マルクスは次のように評する。

> さまざまな王国が，ヴェネツィアに体現される資本の優位にたいしてまさに闘争する。この時代において，封建国家に由来することから封建制の痕跡を残していた王国が，まったく異なる基本〈的諸力〉（アメリカなどでの金・銀の発見，常備軍向けの国内融資の必要性，〈そのさなかでの〉植民地〔建設〕）の作用もあって，資本経済 ── それゆえブルジョアジー ── の支配のもとに置かれようとするからだ。この闘争はまた，この時代には宗教的に ── 教皇権と宗教改革運動との闘争のなかで ── 遂行される。[80]

王だけではなく，あらゆる階層の封建支配層が資本という新たな力を実感し，それに自ら適応していく。マルクスは嬉々として組織的な盗賊騎士，つまり没落封建貴族とその第一人者（ラサール〔Ferdinand Lassalle〕によって戯曲悲劇の主人公にまで列せられたフランツ・フォン・ジッキンゲン〔Franz von Sickingen〕など）の活動について詳細に書き留めている。彼らは都市で債権を買い占めては，自分たちの流儀で ── つまりは強奪と略奪によって ── その債務を取りたてる。

ドイツでの宗教改革の進展は 16 世紀中盤までに，さまざまな講和条約を締結させる一方，その頂点として 1524-25 年にドイツ農民戦争が勃発する。このようなプロテスタンティズムの展開が，宗教戦争として内戦が持ち込まれたフランスやネーデルラントなどの隣国と対比される。ドイツ農民戦争の経過をエンゲルスの著作[ix] によってマルクスは熟知していたがゆえに，この戦争

79　次を参照。IISG, MEN, Sign. B 110/B 159.

80　Ebenda, S. 37.

ix　Friedrich Engels, “Der deutsche Bauernkrieg”, in: *MEW* 7, S. 327-413，エンゲルス「ドイツ農民戦争」『全

そのものは二，三の主要事件として簡潔にまとめられる。── マルクスは，チューリンゲン地方の原プロレタリア層とトマス・ミュンツァーとの結びつきを重視するがゆえに，ミュンツァーが運動指導者として強調される。

この時代の年代史家であるセバスティアン・フランク〔Sebastian Franck〕は不偏不党の立場から物事を観察しようと努め，またドイツ語（非ラテン語）で世界的普遍史を初めて論じた。この人物は，マルクスにとって長大な論評に値する。これにたいしてマルティン・ルターは，マルクスにとっては精彩を欠くとされる。マルクスは宗教改革の英雄を酷評し，「この坊主は宗教改革の真の進歩を妨げる」[81] と記す。さまざまなルターの著作や行動が論評されるとしても，この意味においてだ。シュロッサーはというと，まったく真逆に評価した。長い一節でマルクスは宗教改革の帰結を要約しようとするが，そのさい，とりわけドイツ帝国の政治的新秩序の脆弱さに注目する。

最後にマルクスはもう一度イングランドに目を向け，エドワード 4 世〔Edward VI〕からメアリー・ステュアート〔Mary Stuart〕とエリザベス 1 世〔Elizabeth I〕にかけてのイングランド王権の展開を書き写す。一枚の見取り図で，マルクスはイングランド王家の複雑な血縁関係を描きだす。そこで明白に指摘されることだが，前近代国家とは家族保有物であり，交代しあう ── つまり婚姻関係を結びあう ── 貴族家系の家族経営事業なのだ。シェークスピア〔William Shakespeare〕を生涯熱愛し，自宅でまさにシェークスピア崇拝を実践していた〔シェークスピアの本を毎日読んでいたと言われる〕マルクスは，当然ながら〔シェークスピアが生きた〕エリザベス 1 世時代に強い関心を示している。

〔── 6 − 4　『年代記抜粋　Ⅳ』〕

最後の第 4 ノート[82] では，ヨーロッパでの宗教戦争の経過記録が続く。フランスの第 2 次ユグノー戦争から「良王」アンリ 4 世〔Henri IV〕による和解勅令，スペイン支配にたいするネーデルラント独立闘争の勃発，無敵艦隊の敗北で終わるスペイン＝イングランド戦争，スカンジナヴィア，東ヨーロッパ，南東ヨーロッパ諸国の進展，そしてオーストリアと南東ヨーロッパ全域で宗教改革運動に止めを刺すことになったバルカン半島とハンガリーでの対トルコ戦争である。

ヨーロッパ各地での進展全体をこのように概観してから，ドイツで戦われたヨーロッパ大戦争 ── 三〇年戦争 ── の経過と出来事が詳論される。この戦争の終結とともにオランダ共和国 ── 貴族共和国でも人民共和国でもない，むしろ「ヘーレン〔Heren〕」（オランダ語で公式に「紳士」を指す言葉だが，それは都市部の商業・金融資本家のことである）によって統治される史上初のブルジョア共和国 ── がその独立を達成する。この共和国は 17 世紀の最も発達した資本主義国である。マルクスは，この共和国の経済的成功をもたらしたいくつかの革新（イノベーション）を記録する。これと比較するようにして，1618 年の三〇年戦争勃発以前のドイツの状況が手短に書き留められる。すなわちドイツ帝国は，政治的，社会的，経済的にひどく分裂しており，複数の領土に引き裂かれていた。そしてスカンジナヴィア諸国とロシアについての長大な回顧でもって，マルクスは以前書き残していたものを埋め合わせる。ここでは 862 年以降のロシア史が，四つの長期の

集』⑦，333-423 頁；*MEGA*[2] I/10, S. 367-443.

[81] IISG, MEN, Sign. B 110/B 159, S. 74.

[82] 次を参照。IISG, MEN, Sign. B 111/B 160.

時代に分けられて，17 世紀初頭まで述べられている。

これに続いて 1618 年からの戦争の経過が詳述される。マルクスが関心を寄せるのは，主要な国際政治情勢であり，北方のプロテスタント大国スウェーデンと，カトリック大国フランスの役割だ。1598 年から 1639 年までのフランスの国内発展は，枢機卿リシュリュー〔Armand Jean du Plessis de Richelieu〕に至る幾人かの宰相と政権のもとでもたらされたが，マルクスはこれに詳しく立ち入っている。マルクスの関心は大小さまざまな軍制・行政改革にある。これらの改革によって，フランスでは（そしてフランスでのみ）中央集権的統一国家が構築される。この国家を基盤にして，フランスの統治者であった枢機卿マザラン〔Jules Raymond Mazarin〕や枢機卿リシュリューは —— 国教会として確立されたカトリック教会の利益のためにも —— ヨーロッパ大国政治を巧みに操った。ドイツで問題となるのは，宗教改革の帰結の排除ないしは解決であり，つまりは教会財産の没収である。「三〇年戦争のいたる所で起きたのは，教会所有への戦闘である！」[83]

このシュロッサー抜粋は，1648 年のウェストファーレン講和条約に至る出来事でもって締めくくられる。こうしたヨーロッパの平和的秩序が近代国際政治の始まりを告げる。マルクスは，早くも 1639 年に始まった和平交渉の経緯を詳細に概観し，さまざまな和平案や政治計画をその当事者とともに紹介する。講和条約締結への最終段階である 1646 年から 48 年にかけては，全関係党派の代表者がオスナブリュックとミュンスターで交渉したのだが，マルクスは，そこで続けられた年代順の交渉を月ごとに記している。これに続いて，二つの包括的講和条約の各条項が詳しく書き記される。この二つの条約は，一つは，オスナブリュックにおいて，スウェーデン，〔ドイツ〕皇帝，そしてプロテスタント系の帝国等族[x] とのあいだで締結され，もう一つはミュンスターにおいて，フランスとその他の参戦党派とのあいだで別途締結された。ついには 1648 年 10 月 29 日，ミュンスター市庁舎で全当事者が一堂に会し，全般的講和条約が実現した。

法学者としての教育を受けたマルクスは条約内容を三つに分類している。第一に，スウェーデンとその同盟国の関連条項（領土の割譲，戦後補償など）である。第二に，宗教に関連する条項である。そこで彼が強調するのは，「統治者の宗教，その地に行なわれる」[xi] という中心条項だ。いかなる統治者も，自分の宗派に属さない市民にたいして寛容である必要はない。ただし統治者は市民の移住にたいして 3 年間の猶予を与えなければならない。そして第三に，ドイツ帝国の政体にかんする諸条項である。最も重要な条項は次の内容のものだ。すなわち，これ以前においてはドイツ諸侯の同盟締結権は，諸侯間の同盟であってもドイツ域外諸国との同盟であっても禁じられていた。しかしウェストファーレン講和条約以降，ドイツ諸侯は同盟締結権を認められ，ドイツ皇帝にもドイツ帝国にも斟酌する必要がなくなる。相互間でも，また外的勢力とも，同盟を締結できる権利だ。皇帝と帝国の利害関係と君主大権とはただ形式的にのみ保持され，「そのような同盟が皇帝や帝国に敵対するものを含まないとする条項には容易な抜け道があった」。こうしてドイツ諸侯の「主権」が認められ，彼らは独立小国家の支配者になったと自覚することになる[84]。

---

[83] Ebenda, S. 66.

[x] 「帝国等族」とは，現在のドイツをその版図とした「神聖ローマ帝国」の合議体「帝国議会」を構成する諸身分のことで，諸侯・直属都市・高位聖職者から構成された。

[xi] 信仰属地主義，あるいは君臣信教一致の原則のことを指す。

終わりの数ページにわたってマルクスは，いま一度イングランド史 —— エリザベス 1 世の死去からチャールズ 1 世〔Charles I〕戴冠までの時期 —— に立ち返る。つまり彼は，17 世紀に起こるイングランド革命の前史を箇条書きにする。この革命こそ，オランダ独立戦争以後の第二の近世「ブルジョア」革命である。

この最後のノートもまた，歴史知識を十全に備えた社会科学者マルクスの強みをまさに示している。彼は，個々の国の内的発展から広大なヨーロッパ政治や国際政治へと易々と視線を変え，しかもこの全体の経済的基礎をその視野に常におさめている。三〇年戦争の終結までのあいだ，そしてその終戦以降にあっても，ヨーロッパでは何らかの大国の明確な覇権（ヘゲモニー）は存在しない。しかしマルクスは未来の主要国，すなわち大陸側で台頭する大国フランスと，これに続いて出現する敵対国イングランドとを確固として見すえる。マルクスの頭から離れないのは，「ヨーロッパ」という政治概念 —— フランスの覇権（ヘゲモニー）のもとでのカトリック・ヨーロッパ —— を考案した枢機卿リシュリューの存在である。リシュリューには一貫して巧みに追求された一つの計画があったのであり，「ウェストファーレン講和条約」の真の勝者は彼なのだ。この条約によってドイツ帝国は 100 年以上，政治的当事者としては締めだされることになる[85]。マルクスは「ウェストファーレン体制」を徹頭徹尾，批判的に理解する。そして，この体制を国民国家体制の始まりと見なすといった，現代の「国際政治学」分野でよく言われる発想には，マルクスは思い至ることがない。

〔7〕世界史 —— その含意とは？

マルクスにとって「世界史」という概念は，歴史記述の範疇だけでなく，むしろそれ自体が歴史的に生みだされた範疇でもある。近代資本主義の勃興，ヨーロッパから隣接する世界各地へのその拡大は，世界史の「時代」を画する出来事である。マルクスとエンゲルスは，まずは『ドイツ・イデオロギー』という批判的草稿群のなかで，そして後には『共産党宣言』〔*Manifest der Kommunistischen Partei, Das Kommunistische Manifest*〕において自分たちの命題を打ちたてるのだが，そこで強調される含意は，近代資本主義によって初めて，本当の意味での世界史が存在できるようになるということである。というのも近代資本主義が，世界市場，世界貿易，世界金融，そして国際分業のなかに，あらゆる国々，地域，諸大陸を次第しだいに巻き込むことによって，世界社会の物質的土台が創出されるからである。マルクスとエンゲルスの政治理論では世界経済と世界政治が明確に，手に手をとって進行する。資本主義はそれ自体，拡張的な，原理的に無制限な経済体制と考えられるのであり，それゆえ一つの世界体制（システム）と見なされる。資本主義の政治形態はというと，局地的，地域的な規模と範囲から始まり，統一された法体系と物的インフラとを備えた広域的な領土国家へと拡大し，ついには国民にもとづく国家体制や諸国民国家〔の単なる集まり〕という枠組みを超出する。あらゆる「資本主義」国家が，複数の国民国家の混成体や（多国民＝多民族的，植民地主義的）帝国へと変貌するからである[86]。マルクスとエンゲルス

---

[84] このことから思いだされるのだが，マルクスは 1853 年時点ですでにウェストファーレン講和条約に取り組んでいた。マルテンスが 1807 年に刊行した『外交史綱要』を抜粋したさい，マルクスは「ウェストファーレン講和条約」という名で知られる条約文書を詳細に記録している（vgl. *MEGA*^{2} IV/12, S. 82–84）。

[85] リシュリューについては次の優れた文献を参照のこと。Jörg Wollenberg, *Richelieu: Kircheninteresse und Staatsräson*, Bielefeld, 1977.

[86] この複合的問題については次を参照。Michael R. Krätke, “World Politics and World Economics in Marx’

は世界市場，あるいは資本主義によって支配された世界経済がすでに現実化したと考えるが，最初の世界的な近代的経済危機である 1857–58 年の恐慌は，この二人の確信を強める。それと同時に資本主義的生産様式は世界を貫徹し，こうしてその歴史的使命を果たす。だが世界市場と資本主義的世界経済の発展はきわめて不均等に進行する。世界の一部では近代資本主義がその成熟段階に入る一方，世界の別の地域では近代資本主義はその発展途上にある。1858 年 10 月にマルクスはエンゲルスに宛てて次のように書いている。

> ブルジョア社会が 2 度目の己が 16 世紀を経験したことをわれわれは否定することはできない。── この 16 世紀，そこから僕が期待するのは，その第 1 回目がブルジョア社会を生みだしたように，〔今度は〕その弔鐘を鳴らすことだ。ブルジョア社会の本来の任務は，世界市場を ── 少なくともその輪郭だけでも ── つくりだすことであり，その基礎にもとづく生産をつくりだすことだ。世界は丸いので，このことはカリフォルニアとオーストラリアの植民地化と，中国と日本の開国で終結するように見える。

しかしながら「われわれにとっての難問」が提起される。ヨーロッパの資本主義的生産様式とブルジョア社会がその克服に至るまでに成熟しているのであれば，「この小さな片隅における」社会主義革命「は必ずや弾圧されるのかもしれない ── それよりもはるかに広大な地域においてブルジョア社会の動きがまだ上昇的なのだから」[87]。

『ドイツ・イデオロギー』として知られる草稿群において，世界史の叙述は，ヘーゲルに則りつつも，ヘーゲル左派とは対極にある新たな把握，まさに「唯物論的」なものへと転化する。

> さて，この発展のあいだに，相互に影響を及ぼしあう個々の圏が拡大すればするほど，いっそう発達した生産様式，交通，およびそれらをつうじて自然成長的に生みだされたさまざまな国民間の分業によって，個々の国民性のもともとの閉鎖性が根絶されればされるほど，それだけますます歴史は世界史になる。その結果，たとえばイギリスで一つの機械が発明され，それがインドや中国で無数の労働者からその生活の糧を奪い，これらの国の存在形態全体を覆すとき，この発明は一つの世界史的事実となる。[88]

世界貿易は前衛であり，大工業は，普遍的競争あるいは世界規模での競争によって推進されるこの転覆の梃子(てこ)であった。大工業は「それがすべての文明国とそのなかのすべての個人を，彼らの諸欲求の充足において全世界に依存させ，そして個々の国民のこれまでの自然成長的な排他性を無くしたかぎりで，初めて世界史を生みだした」。「諸個人の世界史的な協働のこの最初の自然成長的な形態」である世界市場は，諸個人を「全面的な依存」に服従させる。だが，この依存関係は一つの疎遠な力として現われ，それゆえ諸個人にとって不可解なもののままとなり，世界史

Thought", Lecture, Universiteit van Amsterdam, 2008.

87　"Marx an Engels, 8. Oktober 1858", in: *MEW* 29, S. 360〔「マルクスからエンゲルスへ　1858 年 10 月 8 日」『全集』㉙，282–283 頁〕; *MEGA*^{2} III/9, S. 218.

88　*MEW* 3, S. 45f〔マルクス，エンゲルス「ドイツ・イデオロギー」『全集』③，42 頁〕; *MEGA*^{2} I/5, S. 40/41〔マルクス，エンゲルス，渋谷正編・訳『草稿完全復元版　ドイツ・イデオロギー　本巻・邦訳篇』，68 頁〕.

もまた不可解なもののままとなる[89]。

1848 年の『共産党宣言』では，まさにこの命題が繰り返される。近代資本主義は，世界市場向けに生産を行なう大工業とともに，その立役者たちを「全地球上」で駆けまわらせる。近代資本主義は，地球規模での影響を及ぼす新たな「生産様式と交通様式」を生みだし，国民的，局地的な隔離状態を克服する。それは，古くからの国民的，地域的な「自給自足」に代わって，地球規模での競争と「諸国民の全面的な依存関係」をもたらし，すべての国々を世界市場へと引きつける。これらの国々は，世界市場の景気循環に従って踊らざるをえなくなる[90]。

この把握をマルクスがもう一度強調したのは，1857 年 8 月に急遽書きつけられた「経済学批判要綱」への序説の終盤である。後の推敲のための傍注にはこうある。「（交通＝通信手段〔Kommunikationsmittel〕の影響。世界史はいつも存在したわけではない。世界史としての歴史は結果である）」[91]。交通＝通信手段の指摘は偶然書かれるわけではない。最初の海中ケーブルは 1851 年に敷設され，危機の年である 1857 年には，ロンドンとニューヨークを結ぶ大西洋横断電信ケーブルが初めて敷設されようとした。その完成は翌年のことである。

その完全に発達した形態での資本主義的生産様式，すなわち産業資本主義があって初めて，世界経済がもたらされる。それゆえ世界史 —— つまりは世界規模での政治活動 —— も可能となり，かつまた必要とされる。このため 1857–58 年の研究草稿には，力強い概略的命題が二，三，書き込まれている。「世界市場をつくりだそうとする傾向は，直接に，資本そのものの概念のうちに与えられている」。資本があって初めて追求されるこの傾向は，あらゆる限界を超えて市場を拡大し，新たな市場をつくりだし，その固有の生産様式をいたる所で「創出する」。

> 〈……〉資本が初めて，市民（ブルジョア）社会を，そして社会の成員による自然および社会的連関それ自体の普遍的取得を，つくりだすのである。ここから資本の偉大な文明化作用〔the great civilizing influence of capital〕が生じ，資本による一つの社会段階の生産が生じるのであって，この社会段階に比べれば，それ以前のすべての段階は，人類の局地的諸発展として，自然崇拝〔Naturidolatrie〕として現われるにすぎない。〈……〉資本は，このような自己の傾向に従って，〈……〉もろもろの国民的な制限および偏見を乗り越え，既存の諸欲求の —— 一定の限界内に自足的に閉じこめられていた —— 伝来の充足と，古い生活様式の再生産とを乗り越えて突き進む。資本は，これらいっさいにたいして破壊的であり，たえず革命をもたらすものであり，生産諸力の発展，諸欲求の拡大，生産の多様性，自然諸力と精神諸力の開発利用ならびに交換を妨げるような，いっさいの制限を取り払っていくものである。[92]

---

[89] *MEW* 3, S. 60 und 37〔マルクス，エンゲルス「ドイツ・イデオロギー」『全集』③，56，33 頁〕; *MEGA*^{2} I/5, S. 87/88 und 42〔マルクス，エンゲルス，渋谷正編・訳『草稿完全復元版　ドイツ・イデオロギー　本巻・邦訳篇』，136，138，70 頁〕.

[90] *MEW* 4, S. 464–466 und 479〔マルクス，エンゲルス「共産党宣言」『全集』④，479，477，493，479 頁〕.

[91] *MEW* 42, S. 43f; *MEGA*^{2} II/1.1, S. 44〔マルクス「1857–58 年の経済学草稿」『草稿集』①，64 頁〕.

[92] *MEW* 42, S. 321 und 323; *MEGA*^{2} II/1.2, S. 320 und 322〔同前『草稿集』②，15，18 頁〕. 世界市場は，マルクスにとって特殊な分析範疇だ。それは単純に世界規模での大市場だけでなく，「一般的流通」の発展形態でもある。そこには多様な流通が集約され，相互に交錯しあう。これに対応して世界市場では，あらゆる類いの資本主義体制，そしてあらゆる既存の生産様式が交流せざるをえなくなり，資本によって支配された世界経済の一部となる。

〔8〕「導きの糸」の見直し ── 国家と市場，ヨーロッパにおける近代資本主義の出現と台頭

マルクスは，まさにその研究の開始時点である 1844 年から，もう一つの企画の実現を試みていた。この政治学批判は本来，国民経済学（今で言う「政治経済学」）批判と直接結びついていたが，国民経済学批判を優先させるために，この企画は延期された（ただし放棄されたわけでは決してない）。実際，マルクスは後の諸著作でヨーロッパ諸国家の発展を繰り返し要約しようと試みた。たとえば 1850 年の『フランスにおける階級闘争』であり，1852 年の『ルイ・ボナパルトのブリュメール 18 日』であり，イングランドの政体と政治動向についての 1853–54 年の連続論説であり，1854 年の連続論説「革命のスペイン」であり，1856–57 年の連続論説「18 世紀外交史の内幕」であり，1860 年の『フォークト君』〔*Herr Vogt*〕あるいは 1871 年の『フランスにおける内乱』〔*Der Bürgerkrieg in Frankreich*〕である。

これらの小論においてマルクスが示すのは，ヨーロッパの発展についての一つの段階系列とその方向性である。この発展は，さまざまな原国家ないしは政治権力の不安定な共存状態から始まる。原国家や政治権力は傾向的に国家へと転化し，同一領土や同一勢力圏をめぐって互いに争いあう（たいてい明確な「封建」的上下関係を伴った ── マルクスが時に使う用語で言うところの ── 封建国家であり，都市共和国と都市同盟，そしてカトリック教会である）。やがてこの発展によって，中央集権的な ── そして集権化に向かい続ける ── 最高権力のもとで領土国家が形成され，絶対君主制，そしてついには立憲君主制や（ブルジョア）共和国に至る。こうして国民国家は，まずはヨーロッパ域内での帝国建設（古代ローマ帝国の継承）を企てては幾度も失敗を繰り返し，次いでヨーロッパ域外勢力の侵略活動にたいする防衛を経て，ヨーロッパ的多国家間体制を確立する。マルクスの表象に浮かぶ国家発展の古典的地域はフランスである。そこでは国家・統治形態が変転する（折に触れてマルクスはポリュビオスにならって，これを政体循環の進行と見なす）とともに，専門分化を伴った中央集権的，官僚制的国家権力が構築・拡充されていく。この近代的発展の帰着点に，中央集権的な統一組織を備える国民的領土国家があり，それは議会統治と普通選挙権とを有したブルジョア共和国という形態をとることになる。フランス国家の発展という「古典的」事例をマルクスは何度となく書き記した[93]。

ところが 1850 年代に早くもマルクスは次の点も明確に理解する。すなわちヨーロッパのさまざまな国も地域も，この図式にはまったく当てはまらない。たとえばスペインは異なる。「革命のスペイン」の最初の論説でマルクスは 1854 年までのスペイン国家の発展をヨーロッパの他の地域と比較する。スペインでは早期に絶対君主制が出現したが，しかし中央集権化は起こらず，強制的な「社会統一」も遂行されず，諸都市や諸身分の政治的権利と自由とが残存した。他方で，これらの権利と自由は，ヨーロッパの他の地域では国家の発展の犠牲となったのである[94]。別の

---

[93] Vgl. *Der achtzehnten Brumaire* …, in: *MEW* 8, S. 150f und 196f〔マルクス「ルイ・ボナパルトのブリュメール 18 日」『全集』⑧，144–145，192–193 頁〕; *MEGA*^{2} I/11, S. 132f und 178f; *Der Bürgerkrieg in Frankreich*, in: *MEW* 17, S. 516ff〔原著では「515ff」だが，日本語版で訂正〕，538ff und 591ff〔マルクス「[『フランスにおける内乱』第 1 草稿]」『全集』⑰，489–491，510–514 頁，同「[『フランスにおける内乱』第 2 草稿]」『全集』⑰，561–566 頁〕; *MEGA*^{2} I/22, S. 36ff, 53ff, 100ff.

[94] 次を参照。*MEW* 10, S. 434–442〔マルクス「革命のスペイン」『全集』⑩，445–452 頁〕; *MEGA*^{2} I/13, S. 417–421.

特殊事例であるロシア国家の発展については，マルクスはその特色を，1856–57 年の連続論説「18 世紀外交史の内幕」で描いている。そこでの彼の説明によれば，ロシア国家の特異な形成は，モンゴル帝国 —— 純粋な貢納制原国家 —— の支配にたいする長期の闘争から歴史的に生じる。モンゴル支配やロシア内の都市共和国との闘争を経て，モスクワ支配のもとでロシアは統一されたが，このことからピョートル大帝〔Пётр Вели́ким (Peter der Große)〕統治期にロシアで始まる近代国家建設の特殊形態が明らかとなる[95]。こうした歴史資料にもとづく叙述は，大国の一政治史にたいするマルクスの寄与となるが，それは「一般的考察からではなく事実」[96] でもって着手され，「周知の資料にたいする新考察」というよりは「新しい歴史のために新たな資料」[97] を提供する。それゆえ「歴史上の発見」であるとともに，新たな歴史把握の真の検証にもなろうと，マルクスは自分の論説を実に誇らしげに評したのである[98]。

マルクスはイギリス政治，アイルランド問題，大英帝国の植民地政策も集中的に分析した。これによって即座にわかったことだが，この〔グレートブリテン〕島では国民国家が早期に発展したにもかかわらず，イングランド国家ないしはイギリス国家の発展もまた，この〔フランスの発展〕図式に当てはまるものではない。最後にドイツはその大部分が，近代国家の発展の手前にあった。これに続いてアメリカ合衆国にもマルクスは繰り返し強い関心を寄せる。だが，このヨーロッパ由来のブルジョア共和国は，ブルジョア革命を進展させて民主主義的国家形態を形成したが，ヨーロッパ各国と比べうる国家機構は備えなかった。

マルクスは，その歴史＝経済的研究でも，その歴史＝政治的研究でも，近代国家 —— さらに言えばヨーロッパ的多国家間体制 —— の発展と，近代資本主義の発展との連関をますます自覚していく。国家権力は単に，資本主義の出現と発展とを加速させる「梃子（てこ）」であるだけではない。発達した国家の存在がなければ，資本主義的生産様式も想定できない。国家がなければ，市場も，貿易も，貨幣制度も，信用制度も存在しえない。国家がなければ，工場制度も，近代的賃労働も存在しえない（近代的奴隷制も存在しえないのは言うまでもない）。

ここでマルクスの経済学草稿のあまり知られていない文章から一例だけ挙げてみよう。『経済学批判』第 1 草稿（原初稿）の断片でマルクスは，近代的貨幣制度の発展と近代国家との連関を強調する。

> 絶対君主制は，それ自身がすでに，ブルジョア的富が古い封建的諸関係とは相いれない段階にまで発展したことの産物なのであるが，絶対君主制は，辺境のあらゆる地点において

95　Vgl. Karl Marx, *Enthüllungen zur Geschichte der Diplomatie im 18. Jahrhundert*, in: Karl Marx, *Politische Schriften*, Bd. 2, hrsg. von Hans-Joachim Lieber, Stuttgart, 1960, S. 727–832〔カール・マルクス，石堂清倫訳『十八世紀の秘密外交史』，三一書房，1979 年〕.

96　“Marx an Isaac Ironside, 21. Juni 1856”, in: *MEW* 29, S. 538〔「マルクスからアイザク・アイアンサイドへ　1856 年 6 月 21 日」『全集』㉙，419 頁〕；*MEGA*^{2} III/8, S. 29.

97　“Marx an Charles Dobson Collet, 23. Oktober 1856”, in: *MEW* 29, S. 542〔「マルクスからチャールズ・ドブソン・コレットへ　1856 年 10 月 23 日」『全集』㉙，423 頁〕；*MEGA*^{2} III/8, S. 56.

98　マルクスはエンゲルスと自分の妻への私信で，このように明言しており，「ドイツにいる老歴史家シュロッサー」への献本の意向さえも示している（“Marx an Jenny Marx, 21. Juni 1856”, in: *MEW* 29, S. 536〔「マルクスからジェニー・マルクスへ　1856 年 6 月 21 日」『全集』㉙，418 頁〕；*MEGA*^{2} III/8, S. 32; “Marx an Engels, 12. Februar 1856”, in: *MEW* 29, S. 11ff〔「マルクスからエンゲルスへ　1856 年 2 月 12 日」『全集』㉙，10–13 頁〕；*MEGA*^{2} III/7, S. 230ff）。

〔中央と〕同一形態の一般的権力を行使することができなければならず，そのことに対応して，こうした権力の物質的な梃子(てこ)として一般的等価物を必要とした。つまりいつでも即応できる形態にある富 ── こうした形態にある富は地域的，自然的，個人的な特殊的諸関連からはまったく独立している ── を必要とした。絶対君主制は貨幣形態にある富を必要としたのである。〈……〉だからこそ絶対君主制は，貨幣が一般的支払手段に転化するように作用する。こうした転化は，強制された流通によってのみ，なしとげられうるのだが，こうした流通はまた諸生産物をそれらの価値以下で流通するようにさせる。[99]

マルクスがここで記すのは，近代国家の歴史的形態の一つである絶対君主制なのだが，それが経済的に存在できるあり方は租税への依存関係にかかっている。あらゆる租税を金納税に転化させるのに必要となるその政治的行為が，資本主義的生産様式に初めて適合するような近代的貨幣制度を発展させる梃子(てこ)になる。財政術が立脚するのは，あらゆる生産物の商品への転化であり，そしてその商品の貨幣への転化である。しかも，あらゆる租税は，国家権力の十全な動員によって，まさに「強制的」に，金納税として徴収されるようになる。こうしたことが起こるのは，「絶対君主制が興隆しつつある時代」においてなのだ。資本主義の前提条件の一つ ── 実効的な一般的商品・貨幣流通，および，いついかなる所にあっても必要機能を果たせるような貨幣の存在 ── を初めてもたらすのは，特定の時代にあったこの国家形態なのである[100]。

国家の発展と資本主義の発展とのこうした連関を適切に把握することは，マルクスにしてみれば最も困難な点だと見なされる。『資本論』で彼が提示しようとするのは，自分の批判理論の基礎部分，つまりその「核心的部分」であり，「これに続くものの展開」は，その基礎にもとづけば「その他の者でも〈……〉容易になしとげられる」はずであった。ただし，「社会のさまざまな経済構造とさまざまな国家形態との関係」は，この例外だとされる[101]。

マルクスは 1870 年から，アメリカ合衆国とロシアで新たに勃興しつつあった資本主義の発展を詳細に研究する。それに伴って彼が確信を深めたのは，歴史的資本主義は一つではなく，複数あるという見解であり，資本主義の単線的発展ではなく，その複線的発展があるという見解である。政治＝経済的世界体制(システム)としての資本主義の発展は，彼が当初想定した以上に複合的な歴史で

99　*MEGA*^{2} II/2, S. 19f〔マルクス「経済学批判。原初稿」『草稿集』③，34–35 頁〕.

100　Ebenda, S. 20〔同前，35 頁〕.

101　“Marx an Ludwig Kugelmann, 28. Dezember 1862”, in: *MEW* 30, S. 639〔「マルクスからルートヴィヒ・クーゲルマンへ　1862 年 12 月 28 日」『全集』㉚，518 頁〕；*MEGA*^{2} III/12, S. 296. マルクスの他の書簡の多くの言いまわしもそうだが，この一節はいかようにもとれる。マルクスは，自分の「経済学原理」（他の書簡にも見うけられるが，これはリカードとシスモンディ〔Jean Charles Léonard Simonde de Sismondi〕をあてこすった言葉である）にもとづけば，「これに続くもの」すべてが ── すなわち彼にとって未解決のものが ── 将来，他の弟子たちの手で容易に解決されると主張しているが，これは露骨な誇張である。〔第一に〕マルクスの経済学批判で未解決のままに残された諸問題をいかに適切に解決するかについては，今日でも論争が交わされている。第二に，経済的社会構造と国家の世界史的発展を分析するという課題は広大な研究計画であり，マルクスもその二，三の基本要素しか提示できなかった（マルクスの足跡をたどったエンゲルスも忘れてはならないが，この計画は彼をも超える）。古典的マルクス主義者（とりわけマックス・アドラー〔Max Adler〕，オットー・バウアー〔Otto Bauer〕，ルドルフ・ヒルファーディング〔Rudolf Hilferding〕，カール・レンナー〔Karl Renner〕といったオーストリア・マルクス主義者）は，国家と資本主義の発展関係を研究するにあたって応分の寄与を果たしたが，今日の一部自称「唯物論的」国家論者にいたっては何の貢献も果たしていない。〔この原注の最後の 1 文の（　）内の人名は日本語版で追記された。〕

あるかもしれなかった。この二つの新たな資本主義は，アメリカ合衆国でも，ロシアでも，国家と連関して発展したが，さまざまな点で西ヨーロッパの模範国とは照応しなかった。アメリカ資本主義は急激に発展し，産業資本主義の古典的模範国イングランドを凌駕しはじめていたほどであった[102]。したがって世界史研究に新たに取り組む理由がマルクスにはあったのである。

1881–82 年のマルクスの世界史研究には，全体を貫く主要な考え方がいくつか存在する。それらは資料の配列やその強調点に表われており，したがってマルクスによるボッタ読解やシュロッサー読解，そしてその記録のなかでの修正箇所に表われている。その核心は近代国家の発展にある。だが，国家の発展は，商業，農業，鉱業，金融業の発展，あるいは空間的インフラの発展と連関する過程として（つまりマルクス＝エンゲルス的な歴史把握という意味で）考察される。国家と法と行政組織との連関にも，また戦争 —— ないしは軍事組織や軍事技術 —— と国家との連関にも（良い意味で歴史＝唯物論的なかたちで），多大な関心が向けられている。

この研究が 1859 年の「導きの糸」の定式の改訂，したがって「唯物論」的な歴史把握の改変にたいして何を意味しえたのかについては，推測することしかできない。ただ次のことは明らかだ。1844 年から始まった自らの長い研究過程の最後にマルクスがまさに理解したのは，資本主義の発展も，また資本主義の発展と連関する —— この発展を条件づけ，かつこれによって条件づけられもする —— 近代国家の発展も，そのいずれも単線的に進むのではなく，常に同じ帰結をもたらすわけでもない，ということである。それは，仕上げられずに終わった未完の『資本論』にも影響を及ぼす。すなわち，この理解の帰結として，1864–65 年の第 3 部草稿でマルクスが確信をもって定式化した資本主義の「一般的な型」，あるいは「いわばその理念的断面図」における資本主義の発展は，明らかに把握困難なものとなる[103]。1870 年代にはマルクスも認めたように，一般的な型や理念的断面図は西ヨーロッパ資本主義だけに関わるものとされた[104]。しかし，この

102　よく知られているように，マルクスは将来の『資本論』，つまりその全面的改訂版では，資本主義の「古典的」発展モデルとして，イングランドではなく，アメリカを取り上げようとしていた。このモデル転換は思うようには順調に進まない。というのもイングランドは疑いもなく工業発展の模範国のままであったからであり，アメリカは，農業の工業化を初めて広域で実現した国であったからだ。そして近代的信用制度の発展については，さらに多くの競合的模範事例が存在した。ロンドンは，マルクスの時代には国際金融市場の中心地であり，同時に国際信用・貨幣制度の中心地でもありつづけたが，ニューヨークとシカゴは近代的な証券取引所（有価証券取引所と商品取引所）を発展させたまさに先駆地であった。それにもかかわらず 1870 年代のアメリカには統一的貨幣制度が存在しなかった。アメリカ銀行業界には連邦レベルでの中央発券銀行が 1913 年まで存在しなかったのである。

103　*MEW* 25, S. 152 und 839〔マルクス，エンゲルス編「資本論　第 3 部」『全集』㉕，182，1064 頁〕；*MEGA*^{2} II/15, S. 144f und 818. エンゲルスは，〔現行版『資本論』第 3 部の刊行にあたって〕これらのくだりをマルクスの手稿から一言一句変更していない（*MEGA*^{2} II/4.2, S. 215 und 853）。

104　『資本論』において当時理解された資本主義的生産様式は，地球上のわずかな場所に例外的にしか存在しなかった。この点をマルクスは承知していた。資本主義的生産様式が支配的となり，社会的生産全体，社会的交通全体を貫徹するものになるといった話題は，マルクスの時代には未来の夢でしかなかった。エンゲルスによれば，古典派経済学者についてマルクスは 1847 年に次のように述べた。

> したがって，経済学者 —— リカードその他の人々 —— は，現にある社会よりも今後あるべき社会についてよく知っている，と言ってよい。彼らは，現在よりも未来について，よく知っているのだ。（Friedrich Engels, “Der Freihandelskongreß in Brüssel”, in: *MEW* 4, S. 307〔[エンゲルス]「ブリュッセルの自由貿易会議」『全集』④，323 頁〕；“Speech of Dr. Marx on Protection, Free Trade, and the Working Classes”, in: *MEGA*^{1}, Bd. 6, S. 430.）

ように認識したとしても，一般的理論が近代資本主義の「理論的歴史」とどのように結びつくべきなのか，という問題は解決されるわけではない。ただ，またもやその問題が明確となったにすぎない。

いかなる原則も存在しないと自ら主張したエンゲルスは，マルクスと自分が「唯物論的な歴史把握」という研究計画を立てたさい，即座に従った〔唯一の〕原則を，次のように定式化した。「歴史全体が新たに研究されなければなりません」[105]。これこそまた長きにわたって入り組んだ資本主義の歴史に当てはまる原則である。この歴史にかんして理論は，その有効性を示さなければならない。

（了）

この言葉はマルクス自身にも当てはまる。〔この原注の「エンゲルスによれば」以降の文章は英訳版で追加され，日本語版でさらに修正のうえ，引用文と典拠が追記された。〕

[105] "Engels an Conrad Schmidt, 5. August 1890", in: *MEW* 37, S. 436〔「エンゲルスからコンラート・シュミットへ　1890 年 8 月 5 日」『全集』㊲，380 頁〕；*MEGA*^{2} III/30, S. 390.